

ある調査の記録：「フィールド日誌」に見る鶴見の日系人世界  
 —— 都市エスニック・コミュニティの形成と自己確証の行方 —— \*

広 田 康 生  
 藤 原 法 子

1. はじめに —— 問題の所在と調査の概要

本稿は、1992年6月から11月まで横浜市鶴見区で実施した「日系人コミュニティ面接調査」の要約と抜粋である<sup>(1)</sup>。本稿の主旨は、自らのそれとは異なる文化・社会に入った人々が、その「状況」をどのように定義し、「適応」し、そこでどのように「自己形成」をはかっていくか。また、周囲の人々や機関は彼らにどのような対応をはかっているか。そうした諸点を幾つかの事例をとおして描くことにある。

ところで、わが国においても最近漸く「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」

目 次

I. はじめに —— 問題の所在と調査の概要 .....	1
II. 「フィールド日誌」から .....	3
1. 単身就労者たち .....	3
2. 家 族 .....	8
3. 児童たち .....	18
4. 補論：シングル・ウーマン .....	28
5. 事業家 (ethnic entrepreneur) とコミュニティ組織 .....	31
6. 対応する人々と舞台としての都市「鶴見」 .....	35
III. 結論：エスニック・コミュニティ論断章 —— 異質性認識と都市社会学 .....	37
<編集後記> .....	44

研究の要請が高まってきた。とりわけ家族で来日する所謂「外国人就労者」の増加は、たとえそれが僅かの期間にせよ、自らのそれとは異質な世界で遭遇する様々な問題を、その家族や児童の生活領域での問題として呈示してきた。いわば、個人としての、ないしは家族としての、そして彼らの形成する「組織」の日常的な「適応」過程が問題になる。「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」としての研究題域が重要性を帯びてくる。

だがわが国の場合、「適応過程」に生じる様々な「テーマ」を考察するための「視点」や「方法」は決して整備されているとは言えない。何を、どのような側面に焦点をあわせてどのように調べて行けば良いのか、そのための議論が充分になされているとも言いがたい。ちなみに米国の都市社会学においては「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」の形成と相互の異質性はすべての研究の前提となっている<sup>(2)</sup>。

ともあれ、少なくとも研究の出発点において我々に要請されることは、彼らエスニックたちが、「生活者個人」として、自らのそれとは異質な世界において経験する現実や直面する状況をどう捉え、どう理解するか、彼ら自身の「現実」を理解することである。すなわち、彼らが“移民という行為”<sup>(3)</sup>をどのように経験し、そこにどのような問題が生じているのか、彼ら自身の“状況の定義”や「適応の過程」、そして「自己確認」の位相をどう理解するか、が問題になる。彼らが直面しそして乗り越えようとしている「彼ら自身の現実」や具体としての個人や家族の「思い」、そして彼らの「生き方」に目をむけることが今要請されるのである。我々が照準を合わせなければならないのはまさにこの意味での「移民経験 (immigrant experience)」の諸相である。

筆者らのヒヤリング調査は、その都度その都度の調査の連鎖から構成されておりその意味で完全に「手作業的」である。したがって本稿が描く鶴見の日系人世界の諸断片は、かれらの世界の全体像からすればいかにも“パッチワーク”的構成の段階に留まっている。ただ、その“パッチワーク”的に明らかにされた「世界」からでも筆者は、現在の日系人たちが抱える immigrant experience の諸相と問題状況の多くを提示できたと思う。これらの諸問題と研究上の課題については最後の章に整理して呈示するつもりである<sup>(4)</sup>。

最後に本稿で採用した「フィールド日誌」の呈示という方法について前もって述べておかなければならない。前述の「目的」からして筆者らのヒヤリング調査は、本質的に「仮説検証型」というよりは、「問題発見型」の調査とならざるをえなかった。したがって面接調査は「適応に関わる上述の諸テーマ」に合わせられていたとはいうものの、基本的に「自由面接法」の体裁をとっていた。さらにヒヤリング調査の有益な点は、「質問」に対するその「受け

答え」以上の「示唆」を、そのヒヤリング全体から受けることである。したがってその結果の呈示にはあらゆる意味で慎重さが必要になる。本稿ではそうした諸点を呈示する一つの試みとして「フィールド日誌」の形態をとりつつ、調査結果を整理するという方法を採用した。「フィールド日誌」の体裁をとりつつ彼らとの「一問一答」をなるべくそのまま呈示し、筆者らの受けた全体的な雰囲気や問題点もできるだけ再現できるように当該のヒヤリングの舞台設定やその場の情景を含めある程度の「ストーリー」構成にのせて結果を呈示することにした。本稿の試みが成功しているかどうかは別にして、我々は回答の背後に潜むその時々微妙なニュアンスも含めて彼らの「適応」の現実と提起される研究テーマ群を理解する必要があると感じたからである。

なお、本稿ではとりあえず「単身者」「家族」「子供たち」「シングル・ウーマン」「エスニック組織」「エスニック・エンタープレナー（事業家）」「都市行政」のそれぞれについての「移民経験」の典型例を「フィールド日誌」から取り出し、その内容を呈示した<sup>(5)</sup>。また、自らの経験の独自性を共有し保障する彼ら自身の「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」の「組織的性格」についても考察した。

さて、筆者らの「フィールド日誌」から、「鶴見の日系人」それぞれの移民経験と直面する問題、そして彼らの「世界」について推測していただきたい。

## II. 「フィールド日誌」から

### 1. 単身就労者たち

彼ら就業目的で来た単身者の場合日本社会への定住意思はほとんどない。だが、生活する以上彼らは何らかの形でその社会との接触をもたざるを得ない。仮にそれが3年という短い期間ではあっても、確実に自分たちの生活空間を切り取り、企業の外の日本社会との接触を持つ。その拠点の一つが「日本語教室」である。かれらは必要最低限の情報をそうした日本語教室から得、それを仲間うちのネットワークに還元する。定住しないからこそ自分たちのネットワークの拠点は必要となる。「日本語教室」は情報収集の場でもあり拠点でもある。帰国の時を待ち望みつつ、異質な世界における「外国人」として、仲間うちのネットワークのなかに精神的な絆を保ちつつ生活している。

(1) [生麦地区センター「NT日本語教室」：1992年6月6日(日)]

横浜市鶴見区生麦にある「生麦地区センター」でのボランティアによる「日本語教室」については、筆者の「地区センター」調査で情報を得ていた。「同センター」指導員の中村喜久栄氏に連絡し、彼女の配慮で「NT日本語教室」の中山裕子氏に出席者との接触を依頼した。「同日本語教室」は毎日曜日ごとに、主に就労者向けに開催されている。午前10:00に「生麦地区センター」に行き、30分ほど簡単な打合せをした。中山さんは、ドイツのエルデという人口3万人ほどの町に、御主人の現地勤務に同行したさい教会でのドイツ語教室に通った経験をもつ。ほどなく日系ブラジル人のO氏(日系ブラジル2世, 男性25歳), H氏(日系ブラジル2世, 男性22歳), W氏(日系ブラジル2世, 男性), K氏(日系ブラジル2世, 男性32歳), K. T氏とK. N氏(日系ブラジル2世, どちらも30代, 夫婦)が出席し授業が始まった。授業は初等の日本語の学習で、買物や道順を尋ねるといった内容を中心としていた。授業そのものは12:00で終了し、そのあとで京急新馬場にある品川神社の祭りに全員が見学に出掛けた。午後2:00すぎに品川神社のそばの中華料理店で、食事をしながらぼつぼつと話が始まった。

「料理は自分で。ごはんを豆をまぜて食べる」(K氏)

「ブラジル料理点はある。鶴見駅のすぐ裏にある。日本人とブラジル人のコックがいる。でもまずい。あまりいかない」(これは全員)

「出歩くところは特にない。ほとんど部屋にいる。鶴見公園の散歩ぐらい」(K氏)

——日本の街の印象はどうか——

「向こうで想像していた日本と違った。まちがきたないし道路がせまい」(K氏)

彼らは市役所等の公的機関にもあまり顔をだすことはないようである。

「市役所にはいかない。住むところを変える時と外国人証明書のとき」(O氏)

話しは食事をしながら続けられた。彼らは自分たちの来日の目的についてぼつぼつと話した。

「私たちは経済で来ただけ。向こうでは月いくら働いても200ドルだから」(W氏)「でもはやく帰りたい」(K氏)

仕事場とアパートを往復し、ひたすらお金のための強調する彼らだが、どのようにして「日本語教室」を知ったのだろうか。そしてなぜ、通い始めたのか。彼ら同士の情報はどのようにして伝わるのだろうか。

——日本語教室のことはどのようにして知ったのですか——



「Oさんの妹とHさんが友達同士で、HさんからOさんが日本語教室にかよっていると聞いて、わたしとWさんも来た」(K氏, W氏)

「OさんとHさんはカンピートで向こうにいるときから知っていた」

「私達は武蔵新庄に住んでいる。OさんとHさんに聞いて「地区センター」にきた」(K氏)  
—— 皆さんはどうして知り合ったのですか ——

「私(K氏)とWさんとHさんはいすず自動車で知合った。Oさんは日産で、Hさんとは向こうで知り合い」(K氏)

—— 日本語をならうひとは多いのですか ——

「あまり習おうとする人はいない。会社ではゆっくり話してくれるが、アパートではみな早口。会社では日本語のできない人に通訳してあげたりする。日本語を全然話せないひとも多い」(K氏)

「日本語は向こうにいる時に家族が話していたから多少は知っている」(川本さん)

「私は子供の頃は日本語で、大きくなってからはブラジル語で、日本語はあまりはなせなくなった」(W氏)

—— 日系人の組織はあるのですか ——

「日系ブラジル人のオフィシャルな組織はある<sup>(2)</sup>。でもほとんどいかない。“えらそうな”ひとがいてダメ」(K氏)

「友達であつまる。わたしはKさんやHさんと集まる。食事をつくったりはしないがたまに日曜に4, 5人でブラジル料理店に行く」(K氏, W氏)

彼らは自分たちをあくまでも外国人として規定している。

—— 私からみると貴方はどこからみても日本人だが ——

「歩き方から何から、私達はすぐに外国人とわかる」(Kさん)

—— 顔は似ているでしょう ——

「顔はにているけど全然ちがう」(同)<sup>(6)</sup>。

(2) [[「ペルー日系協会」での二人の単身者 1992年7月19日(日)]]

定住しないからこそ彼らは自分たちの拠点を必要とする。とりわけコミュニアルな組織が必要になる。筆者らは「ペルー日系協会」で活動をしている二人の単身者に話を聞いた。ヒヤリングに応じてくれたのは、N. ハビエル氏(日系ペルー2世37歳)とO. フェルナンド氏(同38歳)の二人であった<sup>(7)</sup>。

—— 日本での仕事は何ですか ——

「向こうでは3人の友達と車の部品を輸入して販売する仕事をしていましたが、日本ではいはず自動車に勤め、今は、レストランに勤めています」(ハビエル氏)

「いま日本では、自動車工場に勤めています。日野車体です」(フェルナンド氏)

—— 家族はどうしているのですか ——

「日本には家族をおいて来ている。2年後にはペルーに帰りたい。奥さんは日系3世ですが、本当は日本に来たいといっている。ただ、生活することを考えると無理。子供は日系4世で9歳の女の子、7歳の男の子、6歳の男の子、そして1歳の女の子の4人が向こうにいる」  
(ハビエル氏)

—— 日本語については向こうで習っていたのですか ——

「父は日本人で母は日系2世だ。母の考えはおじいちゃんの考えの影響をうけて日本人と変わらない。それで日本語を勉強させられた」(ハビエル氏)

—— 今の生活で何か問題はありますか ——

「今、日系人が一杯きている。ただ時々プロブレムがある。就労ビザが短いこと。皆で一緒にきたいのだが、3年では短すぎる。それに、3世4世では特に、日本語ができないこと。もし病院でもアパートでも学校でも、家族が来たりした時、話を通じない。だから家族といっしょにこれない」(ハビエル氏)

—— 日本に親戚はいますか、どの程度連絡をとりますか ——

「いる。今まで3回沖縄にいった。沖縄にいる親戚を頼って、沖縄で働くかもしれない。」(フェルナンド氏)

—— 日本で働きたいのですか ——

「日本は自分の国。働きたいけど、わからない」(フェルナンド氏)

—— 「ペルー日系協会」にはしょっちゅう来るのですか ——

「ここは土曜日と日曜日にくる今20人ぐらいで事務局活動をしている。日本語教室とかスペイン語教室とか日本語教室を開いている。鶴川の大学(和光大学)のグラウンドでサッカーの試合をしている。ワジ・ワジ・カップという。ここに、日系のチリ人とかブラジル人とかペルー人が集まってくる。毎日日曜日朝10:00ごろから6:00ごろまで試合をしてそのあとでパーティをする。いまその準備をしている。このパーティには500人ぐらいの家族が集まって、弁当を食べたりする」(ハビエル氏)

(3) [Yファミリーの兄弟たち：1992年7月12日（土）同ファミリーの自宅]

いわゆる“就労目的”の人々の場合でも、彼らは「生活者個人」として故国に残してきた家族への想い、故国での日系コミュニティとの関係性、日本での日系人コミュニティとの接触の現実、そして将来像などについて強い関心をもっている。前述のように彼らは「外国人」として自らを規定している。しかし彼らは同時に理解を欲している。

京浜急行八丁畷駅から10分程歩いた下末吉の静かな住宅街のアパートで「Yファミリーの兄弟たち」へのヒヤリング調査が実施された。2DKの綺麗なアパートに彼らは生活している。出席者はY、ジュリオ氏（長男34歳）、リカルド氏（次男30歳）、アジルソン氏（3男29歳）、マルセロ（4男21歳）、マルセロ（5男21歳）、それにジュリオ氏の奥さんそして「通訳」をかって出てくれたY氏家族である<sup>(8)</sup>。

—— おとうさんは向こうでどのような仕事をしていたのですか ——

「父親は1928年に岡山に生まれ、ブラジルのサンパウロ州の奥地でコーヒープランテーションの作業労働に従事していました。15歳のとき、通訳の仕事をしていたそうですが30代になって仕事を拡大し、綿作をしました。その後、1965年にサンパウロ州のアルサトーバ市に出てきて、パステルを中心とした食べ物屋を開店し、今は、隠居しています」（ジュリオ氏）

—— 皆さんは日本に来る前ブラジルではどのような仕事をしていたのですか ——

「僕は、サンパウロのサンジューダス大学の経済学部を卒業し、冷蔵庫やガスコンロの生産と販売を行うコンチネンタル社に勤務し、係長でしたが、その職を途中で投げ捨てて日本に就労のためにきました」（ジュリオ氏）

「次男のリカルドは、サンジューダス大学を卒業して、日本にきて、3男のアジルソンは、モジダスクルーゼス大学(法科大学)の4年に在学のとき、日本に就労にきた」（ジュリオ氏）

—— なぜ日本に就労にきたのですか ——

「卒業後の仕事の選択の幅が狭い。家族で資金を併せて、なにか共同で仕事をするための資金稼ぎの目的があった。スーパーマーケットを開業したい。それには最低、6万ドルは必要です」（ジュリオ氏）

—— 家族でひとつの仕事をしたいのですか ——

「家族のきずなは強い。住むところや生活は別でも、仕事を兄弟でやりたい。日系の人々は兄弟で仕事をするパターンが多い。一人では難しいという面もある」

—— やはりブラジルに帰って仕事をやりたいのですか ——

「自分を生かせる仕事は日本ではない。ブラジルでやりたい。自分の国だから」（アジルソン

氏)

「日本については基礎がない。日本を知り尽くしてはいないし」(アジルソン氏)

——あなたがたは日系の3世ですが、日本に就労に来てとまどったことはなんですか——

「来る前は日本の良い所ばかり、両親から聞いていました。でも来てみたら、人間の良い点が欠けている」(ジュリオ氏)

「外国からくる人が多い割りには、彼らを教える機関がない。日本では我々はまったく文盲になってしまう。これではブラジルにもどったとしても友達や知り合いに何を教えていいか。仕事と家のピストン運動だし、仕事も、下の内容だし」

——日本人については意識しますか——

「意識する。日系人は、ほかの民族とちがって、日本語を勉強しなさい、といわれています。ブラジルでは白人や黒人やアジア系など様々ですが、日本人の場合、伝統的な価値を重んじています。それで、顔が日本人でしょう」(リカルド)

「でも、向こうで日本人、こちらで外国人。同じ血でそういわれるとは向こうでは考えもしなかった」(アジルソン氏)

——日本に来てどうでしたか——

「日本にくる目的は仕事と日本語の上達の目的があったが、日本の奥を学ぶつもりだったが」(アジルソン氏)

「おとうさんの話だけ聞いてきたが、日本にきたらもっと日本を覚えられると思ってきた。前はその機会はなかったが」(リカルド氏)

——それは日本に順応したいとは違うのでしょうか——

「順応ではなく、理解したいということです」(ジュリオ氏)

## 2. 家族

一般に、家族の移民経験とそこに生ずる問題に関しては、子どもの「適応」に関連する問題が深刻である。さらに、その問題にくわえて注目すべきは、いわば「国境を越えた家族」の「絆=ソリダリティ」の問題がある。異質な世界への「適応」において家族はどのような役割を演じるのか——「適応過程」における家族の提起する問題は多様である。

(1) [Y氏家族：1992年6月21日 下末吉の自宅にて]

「適応の過程」にあって家族は、その成員に共通の論理をつくる。特に「生麦地区センター」の中村氏に紹介された Y 氏とその家族に接触した。

1992年6月21日の日曜日に、鶴見駅西口で待ち合わせ、雨も降りはじめているのでタクシーで自宅まで向かった。タクシーのなかで氏は「日本に来ている日系2世や3世のために日本語教室を開いて欲しいと中村先生に申しあげたら快くやっていただきました」と話しを切り出した。下末吉の住宅街の狭い路地を歩いて、Y氏の自宅に着く。6畳ほどの応接間に通され、ブラジルコーヒーを飲みながら話しがはじまった。その話は、筆者らのインタビューに一問一答で答えるというよりは、筆者らと話相手に、自らの移住の軌跡と論理を確認しつつ独白をするという形で進んだ。

「私は、1932年にフィリピンのミンダナオ島に生まれました。父親は沖縄の人だったのですが、現地でマニラ麻の加工工場を経営していました。現地で少年時代を過ごしていましたが、戦争（第二次世界大戦）が始まって、終戦とともにフィリピンの収容所に収容されました。その後、九州の福岡収容所に移送されて、沖縄県人用の収容所だったんですが」「広島の高島に着いた時の寒かったこと。原爆がおとされた後の一面焼け野原の高島が強く印象にあります」。

Y氏はここの収容所で偶然、叔父と再会した。

「一言も話すことなく一晩中向かいあっていました」。

「その叔父は熊本県の八代で教員をしていたのですが、その叔父を頼って、そこで一年ほど中学時代を送ってから、まもなく叔父と一緒に沖縄にもどることになりました」。

「沖縄で高校時代を送っていましたが、昭和9年に、その叔父が一番末の叔父と相談しブラジル移住を決心して、説得されまして、かならずしも乗り気ではなかったですが兄弟5人とともに計7人でブラジル移住を決心しました」。

「ブラジルのマットグROSS州で、原始林を開拓し、米づくりをしていましたが、その間兄がなくなりました。医療施設が近くにあれば、といまでも悔やんでいます」

現在 Y 氏は、果物や野菜のスーパーをや3万坪の敷地の家をブラジルにもっているが、その家は知り合いのドイツ人にあづけて日本に来ている。

Y氏は“成功者”である。日本に戻ってきた理由として彼は、日本での教育を子どもに受けさせるためと言っている。彼は、日本に定住するつもりと言う。

「ブラジルでは国民教育は小学校が4年、中学校が4年。しかしこれは義務教育ではない。それに比べて日本の親は、きびしさがあるから、教育をさせるとおもう」。

Y氏はエクソンの化学品課に勤めている。彼は現在の職場に満足であるという。

「上司との信頼関係があるから。一度、発送のとき、住所を間違えて、和歌山方面にだしてしまった。その時も、彼は、あまりおこらなかつた。信頼されているとおもう」。

Y氏は出入国管理法の改正される以前に、すなわち6年前に沖縄に戻つたが、2年前からエクソンに移り、最近増えてきた日系人の就労者等の斡旋やアフターケアの問題にタッチしている。彼は仕事の合間をぬって、日系人就労者の親睦のための活動に従事している。筆者らがおとづれたこの日も、午後5:00から「ペルー日系協会」主催のサッカー試合に参加する予定だつた。

「2～3世までは両親が日本人で、習慣を理解している。日系4世になると完全に外国人になる」

「日系に誇りをもってもらいたい」

ところで、Y氏にはセルジオ（23歳）とクリスチーナ（16歳）の二人のこどもがいる。彼らは、どのような移民経験をしているのだろうか。

セルジオは、中学3年の3学期（9月）に沖縄にきた。本当は3年だつたが2年に編入した。県立那覇西校が受け入れてくれた。無論彼は、日本の高校にはすぐには慣れなかつた。Y氏は、家の子供たちは大丈夫だつた、と応えたがセルジオによれば、「3～4か月は何もしゃべらないし、話したくとも話せなかつた」

——失礼ですがあなたは自分を日本人と思ひますか——

「日本人の顔はしているが、文化や習慣の違いで1対1で話すと日本人ではないことを実感します」

セルジオは「日本工学院専門学校」を今年の春に卒業し、現在、コンピューター関係の会社に通つている。

——現在なにか問題はありますか——

「今の悩みは、自分の持っている二重国籍が22歳になるとどちらかに選択が迫られることです。つい最近その通知をうけとりました。」

「迷つています。ブラジル国籍を選んだ場合、社員としてはのこりづらい。せつかつつとめた会社だから。でも、ブラジルへの愛着は強い」

「日本の企業に就職し、いま、ちょうど心のバランスがとれたところだし、ただ、もしどちらかを選ぶということになると、ブラジルかもしれない、」

セルジオの場合日本で就職がきまったとはいえ、日本がずっと将来までの職場と決めただけではない。「将来、ニューヨークに行くことがあるといわれれば、それでオーケー。国際的な仕事をしたい」とセルジオはいう。

クリスチナは、この日、高校のクラブ活動の友達と遊びにっていていなかった。だがY氏の話によれば、日本に一番慣れているのがクリスチナであるという。「一番泣いた子が一番なれている。友人がきっかけだった。同僚の影響は強い。働きにくる人も気が合う人と一緒にいるかいがないかが、ポイントになる」。「クリスチナの場合はハーフといわれて結構人気があるようです」と奥さん。

食事をしながら、Y氏家族との話は様々な話題に及んだ。紙幅の関係で全部については掲載できないが、例えば、日系人の多く居住する地域のこと、故国の情報を手にいれる拠点としての旅行社のこと、そして行政への希望などである。彼は行政に対してはスポーツ施設等日系人の拠点の設立を希望している。

この“問わず語り”のインタビューは数時間続いた。ときどき彼は「私の日本語は変ですか」と筆者らに語りかけた。話はほとんどY氏がおこない、合間に、奥さんとセルジオが口をはさむという形式であった。筆者らは、話が一段落する頃合を見計らって、また、来訪することを約束して辞去した。

## (2) [再びY氏宅にて：1992年7月5日(日)]

今回もまた雨の中をY氏の自宅へ向かった。見慣れた路地を行くと、玄関先で少女がすだれ掛けをしている。クリスチナである。家に入ると、セルジオの友人が来ていた。また同じ応接間のソファに座りインタビューが始まった。二度目ということもあってか、なごんだ雰囲気である。ただ一人クリスチナだけが初対面ということで表情がわずかに固い。奥さんの話しからヒヤリングが始まった。

奥さんは1942年に南洋諸島のポナペに生まれた。両親は沖縄の出身で、ポナペで事業をしていた。終戦とともに日本にやって来て、まず三重県、そして沖縄へという道筋をたどる。終戦当時、3歳であった彼女はあまりはっきりとした記憶もない。

——奥さんの場合の移民当時の事情を聞かせてください——

「高校を卒業した後、父親の独断で、ブラジルへの移住が決まりました。移住の話がされたときには、もう手続きが済んだ後でしたよ」

「兄弟姉妹6人と両親の計8人の家族で、ブラジルのサントアンドレ市にいったん落ち着いて、まるっきりわからないブラジル語に慣れるのに3年ほどかかりました。地元の人たちの中に入っていかないことには、覚えられなかったから必死に」

そうした中、1962年に彼女は、Y氏と結婚する。

—— 日本への再移住を聞いたときはどんな感じをもちましたか ——

「日本にくるのを言い出したのは、わたしの方です。もともとブラジルに行った時、納得できませんでしたから。かえって来たかったんです。主人を説得して、来るまでに1年かかりましたけど。向こうにはおかあさんもいるし、兄弟もいるんですけど」

—— 家族（兄弟）と離れることは寂しくなかったですか ——

「淋しいけれど、自分が頼るのは（自分の）子どもたちだから」

—— 家族のそれぞれの国籍が異なってしまうことをどう思いますか ——

「家族にとってより個人のこと。（子どもたちが）どこに行ってもいい。ブラジルに戻ってもいい。家族が離れることにこだわりはない。時代がそうさせている。」

途中から、近所の友人であるのか、親戚の人であるのかがやって来て、奥さんはそちらの対応にも追われだした。

奥さんが台所に行った後、筆者らはセルジオと話をした。

—— 日本に来るときどんな気持ちでしたか ——

「僕は、日本に来ることを最後まで反対していました。母親からも、慣れなかったら、ブラジルに帰ってもいい、ということだったし、自分でも帰るつもりだった。でも、今は日本に来たことを後悔していない」

—— はじめに来た学校ではどうでしたか ——

「中学3年にさせられたので（転入したので）、初めはさみしかった。3、4カ月ぐらいの間は、授業は聞いているだけだったし、話したくても話せなかったし、話し相手は家族だけだったから」

—— 授業には随分苦労したのですか ——

「でも、わからない言葉は全部ノートに書いて、辞書をひらいて調べたから日本語は2年くらいかかって、みんなに追いつくように（理解できるように）なったけれども、それでもいつも国語は苦手だった」

「高校に入っても、1、2年のうちは、文字や言葉を覚えるので精一杯で、教科はほとんど



勉強していない」

「小学1年から入りたかった。今でも日本語の基礎がなっていないと自分で感じます」

——この前は国籍のことで悩んでいると話してましたが——

「国籍に関しては、できるなら（ブラジルも日本も）2つとも残したい。でも、なんとなく今は日本国籍に決心しました。今はその仕事も安定しているし、ブラジルにいま帰ったとしても……」

——日本にいて、違和感のようなものを感じますか——

「今でも、違和感は少しある」

——ブラジルに対しての思いは——

「育ったところ……ブラジルの生活が長いから、（日本にいては）外国人という思いもある」

——国籍や国についてどう思いますか——

「国とか国籍とかあまり考えたことがない。個人の生き方だと考えれば、こだわりがなくなる」

——日本に来た当時、学校側の受入れについてはどう思いましたか——

「自分の来た時期は、外国人がまだ少なかったから（学校で何の対応がなくとも）仕方ない。自分のことだけを考えていたら、まわりが犠牲になってしまう。まわりみんなは、高校受験前で大変だった。自分でやるしかない。漢字とか自分で勉強した」

筆者らがセルジオと話しをしている間クリスチナはソファに座って、ときどき、首をかしげながらじっとその話しに耳を傾けていた。

クリスチナは現在、菊名にある T 女子高校に通っている。「部活」は「語学部（英会話）」に所属している。

——英語は好きですか——

「好き。学校も、英語に力を入れているから選んだ」

クリスチナは、9歳のとき日本に来た。上原小学校の3年生に2学期から入る。1年ぐらいで日本語を覚えるが、5年生くらいからわかるようになったという。

——初めて日本の学校の教室に入ったころはどんなでしたか——

「クラスに一人で入ったときは笑ってごまかしてた。悪口やいじめは思ったよりなかった」

——授業にはついていけましたか——

「初めのうちは、母親に、教科書に、全部ふりがなをふってもらっていた。国語があまり得

意じゃなかったから。でも、今は、言葉の不自由はない」

—— 国籍を選択しなければならなくなったときはどうしますか ——

「本当はブラジル国籍がいい。生まれた国だから」

—— 日本にいて違和感などを感じますか ——

「ブラジルからの手紙などを読むと、自分はブラジル人なのかな……と。でも、生まれた国を意識する程度」

—— 将来の夢は ——

「大学に行きたい。英語が好きで、英語の先生になりたい。TV ドラマがきっかけ」

---

さて、Y氏の家族に表現される「家族をめぐる問題」は、ひとつの家族の特殊例ではない。しかしながら、彼らの家族は時間の経過とともにそれを乗り越えてきた。だが、移民行為の諸経験 (imigrant experience) と、その経験から生じる問題は、特にそこに巻き込まれる子供たちやその母親たちにとって重い問題を与える。次に現在そうした問題の真っ直中にいる家族の問題を女性の目を通して見ておきたい。

### (3) [家族補遺： 女性・母親の立場から見た家族の移民経験]

—— 1992年9月7日 東横線菊名の喫茶店で：Oさん家族のこと ——

今回のヒヤリングは「本町小学校日本語教室」でのインタビューの際、巡回講師の寺原英子氏に無理やり頼みこんで実現した。寺原先生には“通訳”のため同行してもらった。Oさんの両親は、日系1世で、ペルーでコック、農業、洗濯屋などの仕事を経たのちスーパーを経営している。Oさん自身は、ペルーで大学を卒業し、現在の御主人と結婚した。現在38歳である。

—— 日本に来たきっかけはどういうことだったのですか ——

「主人の仕事が日本だったから。日系人がたくさん来て、その仕事の手伝いのために。でも主人の仕事のためだけではなく、ペルーの政情も関係がありました」

—— 日本に来るのは心配ではなかったですか ——

「子供は英語だけ習ってたが、日本語は習っていなかったから言葉は心配だった。主人は日本の大学、慶応大学に5年ほど留学してたから日本語を話せるし、だから仕事もしているし……。主人のお母さんも日本語は話せる。だから日本に来ることには、そんなに心配はなかった。主人が日本の事情を知っていたから。それに、日系ということで、日本は完全に違

う国という意識はなかったから」

—— 日本は“ふるさと”という感じだったのですか ——

「外国だけれど、おとうさんの血がつながっているから、単純に外国ではない。日系人社会のなかで習慣も受けついでいるから、ふるさととはちがうが、まったくの外国とも違う。伝統を受け継いでいるという意識は普段からある」

—— 特に家族全体を見る母親という立場で日本にくることをどう思いましたか ——

「主人の仕事は日本とペルーを行ったり来たり。私達は、はじめから日本に来ると言うことではなかったのですが、ペルーの政情が悪くなり、家族も来ようと決心しました」

—— ところで御主人のお仕事は何ですか ——

「K 観光という旅行会社をやっています。でも今は向こうの人の仕事の斡旋の仕事もやっています。それでしょっちゅう飛び回っていて家にいないことが多いんです。私はその会社を手伝っています」

—— ご主人とはどうして知り合ったのですか ——

「日系人のなかで、家族同士の知り合いだったから」

—— 子供たちは今どうですか ——

「パブロ（小学生）はもうすっかり日本人です。ホルフェも、中学生なのですが、野球部に入っていて元気にやっています。先輩と後輩の关系到びっくりしたみたいですが、それはそういうものと割り切って。ホルフェは年が一つ上なので一目おかれているみたいで安心です」  
話が進んでいく内に次第に、今直面する悩みが話題になった。

—— 今特に子供の教育など戸惑っていることなどはあるのですか ——

「言葉は、コミュニケーションはとれるけれど、国語の問題がある。子どもは……。ペルーでは日系人の教育レベルは高い。学校によるけれども、私立の学校のレベルは日本の学校のレベルよりも高かったりする。今、子どもたちは日本の公立に行っているけれどもそこと較べるとペルーで行ってた学校の方が高かった。日本には『飛び級』や『落第』はないから。むこうに帰ったときは、レベルにあったところに入れるから。年齢は関係ない」

—— こどもの年齢によって日本の学校での慣れも違うと思いますが ——

「長男のホルへはもう中学生で心配ないが、次男のパブロは、ペルーでの基礎が出来ないうちに日本に来てしまったので、心配している。8歳で日本に来て、今では、全く日本人と同じようになっている。スペイン語を忘れかけているのです。そこでたとえば、パブロにスペイン語で話かけても彼は、それに日本語で応対は出来ても、スペイン語が、単語を知らなかったり、忘れていたりして、わからないときがある。連れて帰ることになったとき不安です」

——子どもは将来向こうに連れて帰るのですか——

「子供たちは日本が気に入って帰りたくないと言っている。そうならば、日本の大学に入って、プロフェッショナルな職についてくれればいいと思っている。本拠地はむこうだけど、日本で可能であれば、そうしたい。それで今、公文（という塾）に通わせて、いい高校、大学に行かせる準備はしている。公文では、日本人ばかりで日本人だけのなかでやっているのはいいと思う。」

——でも、Oさん御自身としては、連れて帰りたいたいのですか——

「大人になってからだと言語がなかなか覚えられないし、子どもはどんどん日本になじんでいくし、そういう事が心配。」

「それに子供の教育がやっぱり心配です。ブラジルの友達がいる、その人の話を聞くと、学校が面白くないと言って、学校についていけなくて、このままだとレベルが下がってしまう。向こうでは“出来た”子どもこのままだと心配。父親は別にしても、子供を連れて帰ったほうがいいのではと思ってしまいます。ただ向こうでは政情が不安なので、例えば店も危険に晒されているし、大学の費用も上がっているようだし」

——Oさん自身も帰りたいたいのですか——

「子どもは日本に居たがっている。日本は進んだ国だから、そういう面では（日本で暮らすのは）いいことだと思う。ただ、自分は帰りたいたい。日本の住宅事情（広さとか）の面もペルーの方がずっといいから、帰りたいたい。もし、日本でずっと生活するとしても、家を持つのは難しいし……、主人の仕事も就労というのともちがうし……。」

——ところで、“血の繋がり”とはそんなに大きなものですか——

「ペルーでは日系社会、日系コロンビアができていて、日系人同士のつながりというのは非常につよい。それは、今でもそう。もともとのペルー人とは違った社会をつくっている。日本のなかにいる日本人とは違う。それは戦前からそうです。ブラジルの場合とはちがってペルーの場合はかたまっている。各地方の県人会があって、沖縄のがいちばん大きい。これを含めて、中央日本人会があって、いちばん大きなもの。」

——友人とのつきあいはどうしていますか——

「ペルーにいたときからの友達はあるけれど、遠いから電話で話すくらい。近所というわけではない。」

——家族同士で、日本に来ている日系人との付き合いなどはあるのですか——

「自分はあまり行かないけれど、よく集まるらしい」

——日本での親戚づきあいはありますか——

「主人の母が沖縄の人で、去年の12月に家族で行ってきた。母は、3、4ヵ月ずっとそのまま沖縄にいた。母の兄弟や叔父、叔母がいる。親戚づきあいはよくしている。静岡には父の親戚がいるし……。私は11人兄弟で、7人はペルーにいたけれど、自分も含めて4人は日本に住んでいる。主人も6人兄弟で、全部と（親戚づきあいを）するのはすごく大変。私の父は鹿児島の出で、母はスペイン人とのハーフ。親戚はたくさんいる。」

—— ところで、困ったりしたときは誰に相談したりしていますか ——

「主人が日本語を話せるし、私は他の日系人とくらべたら幸せで特別困ったことはないけれど、日本語教室の先生とかに相談する。特に1年目は心配な事が多くて……。何でも相談していた。主人の出張中は、子どもの持ってくる学校からの知らせ（プリント）がわからなく困ったりもしたけれど。今では、子どもも日本語がわかるので大丈夫。主人と子どもは日本語がぜんぜん問題なくて、自分だけが問題」

—— ペルーについての情報などはどのように手に入れるのですか ——

「日系人協会が提供しているテレフォンサービスがある。市ヶ谷のマナンティアルというところで、スペイン語の本を売っているし、ペルーの新聞もある。主人は日本の新聞も読んでいたけれど、ペルーのニュースはわからない。」

---

子供の日本社会への適応にともなう数々の戸惑い、子供の日本社会への適応と母国の言語・習慣の退潮、子供の適応速度とのズレ、将来の生活拠点の選択に関する家族内の意見の不一致、夫婦の移民経験のズレなどは、適応過程における家族の共通に抱える問題でもある。彼らがこうした移民経験をどう乗り越え将来の方向づけを行っていくかは、今後の課題となる。だが大山さん家族の場合も日系人社会のなかでは上流の部類に属することに注意しておきたい。家族の直面する課題はもっと深刻なカタチで出現する。

さらにここにはもう一つ重要なテーマが伏在していることを指摘しておきたい。いわば「国境を越えた家族の絆とコミュニティのあり方」の問題である。特に、Y氏家族それぞれの“生い立ち”と“移住”の軌跡を背景にしたその話しからは、彼ら家族の成員の「異邦人」としての立場の違いと、それでも維持されている家族の「絆」の問題<sup>9)</sup>、そして彼ら家族が依拠する対象としての「日系人コミュニティ」の有り方等の問題が浮かび上がる。ちなみに、家族の絆はどのようにして維持されているのか。Y氏の場合それは家族の「移民物語」にポイントがあるようである。Y氏の話しは理路整然として、「移民」の経緯を跡付けている。Y氏の話しは家族の“公的な物語”でもある。其は必ずしも子どもたちの適応過程の説明とは一致しないこともある。だが、こうした家族の論理は、こどもたち「適応」の過程に重要な役割

を果たしている。「国境を越えたネットワークとしての日系人コミュニティ」を支える要素は何か。日系人コミュニティとのつながりは、このY氏家族の場合に限らず一般にきわめて強い。そこには、「経験の独自性を保障する社会的基盤」としての「沖縄出身移民」であることをキーワードとして、彼らが特定地域に限定されない、状況に応じたコミュニティを形成している事が示唆される。さらに、かれらの情報や関心に接近するうえでの重要な通路としての「旅行社」や「ペルー日系協会」等の組織も重要な役割を果たしている。

日系人家族の直面する、個々の問題群については無論のことであるが、われわれは、こうした家族の論理形成と、彼らの「移民コミュニティ」の状況適応的で国境を越えた性格にもっと注目する必要がある。

### 3. 児童たち

児童たちをめぐっては日本社会への直接の接触者としてその「適応」に関わる諸問題が話題になる。だが、注目すべきは、彼らの「適応」の位相である。彼らの「適応」における状況の理解と自己確認の形態に注目しなければならない。

横浜市の小学校に「日本語教室」が置かれていることを知ったのは、生麦の地区センターでのインタビューがきっかけであった。子供たちは、それぞれの学校での授業が終了した放課後にこの日本語教室に通ってくる。教育委員会直属のこの日本語教室は現在中区「本町小学校」、鶴見「豊岡小学校」そして戸塚「川上北小学校」の3校に置かれている。

#### (1) [横浜市日本語教室 豊岡教室：1992年6月12日]

鶴見の「豊岡小学校」を訪ね、約30分ほど外国人児童に関する話を聞いた後「日本語教室 豊岡教室」へ向かった。「同教室」は小学校から通りに出て、別棟のなかにある。2教室分のフロアのなかに4つのテーブルと、奥に日本語教育用パソコンがおかれ、一人でも画面を見て日本語の勉強ができるようになっている。教室には5つのテーブルが置かれ、1つのテーブルに3～4人の児童と指導教員1名がついて勉強している。教室は午後1：30分から4：30分まで開校され、授業は3交代制で1時間の授業がおわると子供たちが交代する。子供たちは自分の授業の時間にあわせてこの教室にくる。とりあえず同教室の講師である渡辺充郎氏を中心に途中から笠島氏（女性60代）、小林氏（女性30代）に対してヒヤリングを実施した。

——子供たちは楽しそうですね——

「ここに来るだけでほっとするのか、学校でのストレスがとれるのかポルトガル語でペラペラ話し出します。学校で自分の言葉が通じないと、やはりストレスがたまり、ここで発散するのでしょう。よくしゃべりますよ。ただ問題は、教材がないことです。大人向けの教材はいっぱい出ているのですが、子供向けの教材がない」

——この地区の学校に日本語教室が設置されたのはなぜですか——

「外国人が多く住んでいるからでしょう。もともとこの地域は外国人が多くて、戦時中に強制連行された人達がこの地区に商店や工場を経営し、日本と同化した場合もある。私も鶴見区の中学校にいましたが、当時1クラスあたり5人ぐらい朝鮮の人がいました。全クラス10クラスでした。かれらはよく勉強ができましたけど。それにこの生徒は沖縄系の日系人の子供が多いんですが、戦時中、駅の向こう側に町工場が多くあって、強制徴用で来てそのまま住みついた沖縄出身のひとたちが、今は工場を経営している人が多い。それ以後、沖縄からブラジルやペルーに移民した人の子供が日本に出稼ぎに来る時、それを頼って、この地域にくることが多いのでしょう。沖縄の人達は、『沖鶴会館』に集まって自分たちの通信紙のようなものもだしています」

——日本語の上達具合はどうか、学校にはうまくとけこんでいるのでしょうか——

「半年以上こっちにいれば、日本語で授業されてもわかるようになります。ただこっちでわかって自分から相手にたいして応えられるのとは別で、なかなか出てこない。そうすると、ふてくされていると誤解されたりする場合もあるようです」

——個人差によって、適応の違いがあるでしょうね——

「家庭環境と本人の気持ちの持ち方が（上達具合ととけこみ具合に）影響するようです。親の中には自分も一緒に勉強するおかあさんもいて………母親が積極的に日本社会になじむ人の場合は子供もはやいです」

「それに向こうにいる時からの生活歴もかなり影響していると思います………学校には日本語教室に行くといってそのまま家に帰っていたというケースもあります。その子の場合は調べてみると、向こうでも落第していたようですが。こっちに来てから、親と子の意見があわなくなるときもあります。子供が途中で帰りたくなる。親は3年なり、ビザがある間は働きたい、と思う………そんな時は、子供は学校にも日本語教室にもこなくなってしまう。家に電話もない場合もあって、連絡のとりようがない………」

——具体的には子供たちが抱える問題とはどんなことでしょうか——

「家庭環境も問題で、出稼ぎの人が多いため、共働きです。おかあさんが昼間、おとうさん

が夜勤はめずらしくない。おかあさんが5時ごろかえってきて、お父さんが6時からでかけるわけです。それに日曜日もでるので」

「小学校の場合は、一人の先生が全部の時間を受け持つので子供もことを見てやれるのですが、中学校の場合は担任とはいっても子供をみてやれる時間がなくなる。かれらの扱いかたも徹底しない場合が多く、彼らも出稼ぎを前面にださないため、“帰国子女”という届けをだす。そのため先生も勘違いしてそういう扱いをして失敗してしまうこともある」「それに日本の閉鎖性というか。あるケースの場合ですが、祖母が日本人で自分も日本人とおもっていた子ですが、学校で、『おい外国人』といわれていく気がなくなってしまうという場合もあります」

——現実的には、“いじめ”もあるのでしょうか——

「いじめというか差別というか、日本の閉鎖性というか、ありますね。顔が完全に白人だったり外国人であつたりすれば逆に問題はないが、顔が日本人だったりするとそれで日本語がしゃべれないとバカにしたり、それは日本人からすれば、わからないふりをしているととられたり、ブラジル人といっても信用してもらえないという場合もあるようです。それに、ブラジルでは、混血の国ですから、それぞれ人は、“僕は日本人”“僕は韓国人”と言う風に言っていて自分でも自然にそう思っている。ところが、日本にくと、完全に外国人扱いなわけです。そのギャップに悩む場合もあります」

——日本の学校の対応についてはどう思いますか——

「学校によっては、教壇に立たせて、逆に日本人の児童にブラジル語を教えさせたところもあります。そういう時は、自分でも自信がつくし、いいとおもいます。自信をもたせることをやってほしい。母国語保持の姿勢が学校でも必要です」

## (2) [思春期の子供たちの直面する諸事例]

4:30になり最後の生徒たちが帰り、隣のテーブルで教えていた小林さんと、ついたての向こうで教えていた笠島さんが加わり子供たちについての話しが始まった。特に同氏は「外国籍児童の問題は特に、“思春期の子の問題”が大切で深刻なこと」を力説した。

### ①. A. Hちゃん(中学3年女子)の場合～受入れシステムの問題～

「いろいろな子がいますよ。ペルーから来た子ですが、帰国子女の枠に入れなくて、中学3年生だったんですが、一般校を受験して、数学は7割ぐらい出来たんですが、来て3カ月ぐらいだったので、国語が3～4点だったらしく、高校を落ちたんです。



この子の父親はペルーで大学の先生だったんですが、経済のこともあって日本にきたひとで、そんな家庭で育っていたこともあったのですが、自信をなくしてしまって、結局学校生活に失望して。これだって外国人児童の受入れシステムさえできていれば、この子なんか確実に、頭のいい子ですから。高校の受入れシステムと教員の増員を考えてくれなければ。国際化だのといっても、子供教育のシステムさえできていない」

## ②. T. K 君 (中学1年男子) の場合～地域の許容度と家族解体

「4月半ばにきたある子ですが、中学1年生でブラジルの男の子なんです。来た時は一生懸命で学校に通っていたのですが、両親が離婚したり、本人も、本当に納得して日本にきたわけではなかったらしく、2週間ぐらいで、『どうして日本はこうなんだ?』としきりに文句を言い出したんです。いろいろな理由があったと思いますけど、あわないんでしょうね。むこうでは自分は日本人といていたのですが、こっちでは外国人ですから。また地域の違いもあって、外国人慣れの問題もあって。受持ちの教員と母親の言葉が通じないこともあったし、学校でも友達があまりできず、4週間もすると、学校は半分ぐらい休みだして。母親が朝はやくから仕事にでるし。おじさんがまだブラジルに住んでいるので結局、一人でもブラジルに帰りたいといって、今は帰国する決心をしたようですが」

## ③. 中学1年生日系ペルーの女の子 (匿名) の場合～言葉と生活慣習

「その子の場合は、日系の3世で、“おじいちゃんの国”、“おとうさんの国”というイメージで、日本についてきたのでしょね。よくおじいちゃんには日本語を習っていたといっていましたから。いいイメージをもってたとおもいますよ。ところが、中学にはいることになって、日本に来ていきなり学校ですから、日本語がほとんどわからない。それで祖父母の国という意識とギャップがおきてきて、子供もちらりちらりと子供同士『おまえ、バーカ』とかいわれたとか。話は違うけど、ここの子たち(日本語教室のこどもたち)が最初に覚える言葉は何?ときいたら『ばか』という言葉なんです。

学校の先生も、熱心な先生なんだけど、指導の仕方が、まるで母国語を忘れて、日本語を覚えろみたいなことをやってしまう場合もあって、その子のアイデンティティが壊れてしまったのね。もともと南米系の気質はのんびり、ぶらぶら、ぼんやりといったことが普通なのに日本でそれをやっているとバカとおもわれるのね。向こうではそうしているのが別に普通の態度で悪いことではないもんだから。そんなことで、追い詰められた気分になってしまって登校拒否です。それでも日本語教室だけには通っていたんですけど、それもこなくなって、

『夜学でもいいから学校にいきなさい』っていても『今はいや』って、この前『来年でもいいから』っていったら、『うん、うん』なんていってましたけど」

④. H. Tちゃん（高校1年）の場合:目的意識の設定と自己確認

「いい例もいっぱいあるの。でも特に思春期が問題ね。特に、日本の文化や生活様式にうまくは行ってくればいとおもっている。向こうの生活を否定しないで、こっちの生活も否定しないでうまくは行ってくればね。でもそれがいまいちむずかしいのよ。

メキシコからきた子で、これはうまくいった例なんですけど、おとうさんが日本人でおかあさんがメキシコ人で、中学3年の時に、去年だけ日本に来て、ぎりぎりのときに日本にきたでしょう。それでも進学しなかったから、でも、親の（日本の受験体制に対する対応が後れて、学校の対応もおくれて、中学浪人しちゃったの。それでも教育委員会のはからいで、特に日本国籍があったから、帰国子女の枠に入れてもらって、運がよかったんだけど、横浜の私立なんだけど、Y高校が今年からはじめて帰国子女の受入れをはじめたのね。それにうまくは行って。よろこんで、ラテン系の妹と一緒に、自分は通訳になるんだって。これはよかった例だわね）

特に児童の適応に関しては、彼らの納得の程度と家族の意識そして学校の教員の意識や規則も含む教育システムの問題と民族的なパーソナリティが関係する。筆者らはそうした問題を確認して、6:30分をすぎ教室の戸締りが始まって外に出た。

(3) [再び豊岡分室:1992年. 6月19日(金)]

6月19日の午後に再び豊岡分室を訪れた。渡辺先生から、中学生3~4人と話をする機会をつくろうとの申出を受け、2:30ごろから、A. H(中学校3年生女子. 日系ペルー3世), M. S(中学1年生女子. 日系ブラジル3世), M. S(中学2年生男子. 日系ブラジル3世), N. A(中学1年生男子. 日系ブラジル3世), A. H(小学校6年生男子. 日系フィリピン3世)の5名と筆者らそして渡辺先生の同席でヒヤリングが始まった。

——学校に初めて来た時はどうでしたか——

「コミュニケーションができないし、不安だった」(A. H)/「緊張した」(A. S)

——日本の友達はできましたか——

「まだ、いない。クラブにははまっている。ペルーの友達がいらない。さびしい。月1回ぐら

い電話する」(A, H)/「日本にはいない」(A, H 男子)

—— 困ったことがあると誰に相談しますか ——

「両親にしか話せない」(A, H)/「同じ」(A, S)/「ブラジルの友達に話す」(N, A)/「両親と日本の友達にはなす」(A, H)

—— 今一番悩むことは何ですか ——

「日本語がよくできないこと。できたら大学まで日本でいきたい」(A, H)

「言葉は心配いらぬ。悩むことは高校のこと。ブラジルに帰って働きたい。ブラジルのことが心配。理容師になりたい。両親といつも話している」(A, S)

—— 将来何になりたいですか ——

「学校の先生か、外国旅行ができる仕事」(A, H)/「歯医者。子供のころから」(A, S)「まだかんがえていない」(A, H)

—— 今一番気になっていることは何ですか ——

「ペルーからのインフォメーションが少ない。心配」(A, H)

「新聞のこと。知花さんに買って買う」(A, S)

—— あなたは日本人だと感じるがありますか ——

「むずかしい」(A, H)/「思わない」(A, S)

—— 今一番やりたいことは何ですか ——

「沖縄にいった見たい。おとうさんのうまれたところ」(A, S)

「ロシアにいった見たい。とじられたところ。知られなかった芸術をみてみたい」(A, H)

—— 沖縄の親戚とは連絡しますか ——

「親戚で食事はする」(A, S)

「わたしはない。おじいちゃんの兄弟が沖縄にいる。親戚は小山にいる。でも少ない。電話はする」(A, H)

—— 今、一番、たのしいことはなんですか ——

「自転車で散歩する。家の後ろ、三池公園(上末吉)。ペルーのともだちとたまに日曜日にあう。「ペルー日系協会」にいく。ここにペルーの人がたくさんいる。ペルー人で高校生のおねえさんがいる。夜間高校で、高校のこといろいろ聞ける。学校でなにをやっているかとか。日本の大学生のおねえさんがボランティアできている。日本語をおしえてもらったり、理科のレポートをおしえてもらった。まだよく日本語がわからないから(特に、まだ漢字がよめないので)……………」(A, H)

「土曜日にみんなでボーリングにいく。おねえちゃんのともだちと、ブラジルのいとこと全

部で7～8人でいって、終わったらごはんを食べる。たのしい」(A. S)

話はあまりはずんだとは言えなかったが、それでも彼らはたどたどしい日本語でこちらの質問に誠実に答えてくれた。ヒヤリングの時間は1時間を越えて行われ、彼らはまたそれぞれのテーブルに戻った。

(4) [本町小学校日本語教室「夏期補講」で：1992年8月27日(木)]

横浜市の三つの小学校に設置されている「日本語教室」では、毎年7月の末と8月の末の2回、それぞれ1週間、通学児童の全員を集めての「夏期補講」を行っている。調査の縁で筆者の専修大学の演習からも希望者がボランティア講師として活動した。この「補講」には、横浜国立大学の日本語教育専攻の学生たちが毎年「教育実習」を実施している。

どちらの日本語教室でも、大教室にテーブルが10数台おかれ、そこに5～6名の児童と講師1名が座り、9：00から12：00まで活気に満ちた授業が展開されていた。「補講授業」の後、その教室に残って、参加した学生たちとともに日本語教室の講師の方々へのヒヤリングが行われた。ヒヤリングは、同教室の石井先生と阪柳先生を中心に行われた。

阪柳先生がアンケート調査の結果を切り出した。

「授業の時子供たちからとったアンケートがあるのですが、例えば①「日本に来て良かったこと」については、「物が豊富にある」(日系ブラジル、中1、男子)「スーパーマーケットがある」(日系ブラジル、小6、女子)「日本語が勉強できる」(日系フィリピン、小6、女子)「ゲームがたっくん」(日系ペルー、中3、男子)「通訳になりたいから日本語が出来てよかった」(日系ブラジル、中3、男子)「日本の学校がきちんとしている。日本で勉強してメカニックなことで専門学校に入りたい」(日系ペルー、中2、女子)といった回答がありました」  
——割合豊かなイメージがありますね——

「小学生の家庭訪問にいったら見ると、経済的にはお金は持っているようです。ただ、親が両方とも働いているので、小遣いをもたされるという意味もあって。言葉が通じなくともお金があれば」

——日本に来て困った点についてのアンケートもあるのですか——

「日本に来て困った点についてはたくさんあります。いじめや生活習慣の違いからくる誤解も多いようです。アンケートでは例えば「いたづらがひどい。人が嫌がることをする。背中に紙を張る。物を隠す」(日系ペルー、中3、男子)「シャツの裏に落書きする子がいる」(日系ブラジル、中2、男子)「部活で、先輩後輩の差がある。2～3歳の違いしかないのに」(日系ブラジル、中1、男子)「ちょっと気に食わないと、あなたジャマよ、といわれる」(フィ

リピン、中2、女子)といった回答がありました」

「それと、中国から来た子供たちの場合、祖父の世代に侵略を受けたことを必ず話します。思想的なことも話します」

—— 政治的なことも話題になるのですね ——

「政治的なことについては日本の子供たちよりも関心は強いようです。例えば、フィリピン人の子供がいるのですが、『先生、誰が好き？。マルコス？』と言うんで、びっくりしました。それと、アルゼンチンの子なののですが、『フジモリに大統領になってもらいたくない』というんです。家庭内でそういう話がよく出ているからでしょう」

—— その他の戸惑いはありますか ——

「いろいろあります。例えば中国から来る子供ですが、「給食があわない。日本の食事があわない」(中国、小6、女子)という意見がありました。それに中国ではプールのない学校もあるので、水泳の時、教室で皆が服を脱いで着替えたりするのを見て、屈辱感をもつ子もいるようです。それと、ペルーから来た小学校3年生の女の子ですが、『向こうではシンデレラで日本に来るとシャワーのない部屋だ』って言っています。

—— 普段彼らはどんな生活をしているのでしょうか ——

「彼らはあまり部屋の外にでないと思います。部屋でテレビゲームをしている場合も多いと思います。電話連絡がとれないせいか、よく「日本語教室」を待ち合わせ場所にしていますよ」

—— 彼らは将来をどう考えているのでしょうか ——

「彼らは両親の都合に左右されます。彼らにとって日本にいる時は一体何なのか。この期間は親の犠牲になっているわけです。ですから、帰りたいという子が多い。ただ、日系ブラジル3世のヒデオ君という子の場合、中学2年生ですが、両親が今年12月に帰るのですが、ずっと日本に残って仕事をしたいとっていました。そういう場合もあるようです。それと割合専門学校、特に職業訓練校に行きたいという子もいます」

—— 教えていて疑問に思うこと、苦勞することは何ですか ——

「何を教えたら良いか疑問に思うこともあります。彼らの将来を見ると本当のニーズは何なのか、疑問に思います。日本語を教えるだけでなく、彼らの語学教育のフォローをすべきだと思います。母国語を忘れる場合が多いのです」

##### (5) [補論：少女 K の移民経験]

「横浜市日本語教室 豊岡教室」でのヒヤリングを実施する過程で筆者らは、あるひとり

の少女に注目した。その少女Kは現在中学3年生で、今年の2月にペルーから、両親の都合で来日した。父親は大学の教員だった。日本語については、ペルーで9か月間日本語教室に通っていたというが、日常の会話はなんとかこなせても、まだ十分に自分の考えをいうことはできない。漢字はなお不得手である。一般に、日系人児童たちは、来日して間もなくとも、印象としてはきわめて日本語がうまい。ただ、話せても漢字が読めないというのがふつうで、特に、国語や社会では非常に苦勞する。無論、社会が理解できないのは、漢字だけのせいではない。

筆者らが豊岡教室を訪れた時(6.26)、日本語指導員の笠島先生のテーブルで、Kが期末試験が近いといって社会の教科書の勉強を教えてもらっていた。筆者も同じテーブルに座っていたため、途中から役目をかわって彼女に教え始めた。彼女の教科書にはありとあらゆる漢字にひらがながふられてある。5:00を過ぎても彼女は聞くことをやめず、必死にその意味、内容を理解しようとしていた。日本語の漢字の読みや意味を教えながら、彼女の知りたいのはむしろ日本語そのものよりもその内容というか背景であることに気付いた。Kは、フランス革命、市民革命、基本的人権などの概念はよく理解した。「これは向こうの学校でもやっていた」。ペルーと区別しつつ、日本の社会における常識となっていることにかんして理解したい、という意識が彼女に見られた。

彼女は活発で、しっかりして、頭のいい少女であるとの印象を受けた。学校で試験用に大事といわれたプリントには、すべて回答を書き込んでそれを丸暗記して試験にのぞむ気配であった。その必死の意欲をみていて、クラスで授業を聞いているとき、彼女は、はがゆい思いをしているのではないかと感じた。5:00を過ぎて、日本語指導員の笠島先生と筆者らだけが残っても彼女は社会科をしまい今度は音楽の教科書を取り出して、意味を聞いている。ペルー協会で高校生や大学生に日本語を聞いているのが楽しいという彼女の言葉を思い出した。同化とか適応とか、といった問題の次元ではなく、ひとりの人間としてあたらしい状況を主体的に理解しようとする気迫を感じた。「後片付けはいいから」という笠島先生の言葉で筆者らは教室をでた。

筆者らはKの両親に連絡をとりたいと思った。彼女はこの先日本の高校に入り、できれば大学まで行って、将来は「通訳」になりたい、と別のインタビューに答えていたが両親はどう考えているのかを知りたかったのである。たまたま訪れた「ペルー日系協会」で、Kの父親が、スペイン語の講師をしていると聞いて連絡をとった。8.2日の日曜日に筆者らは、「ペルー日系協会」でKの家族のヒヤリングをおこなった。ヒヤリングが始まったのは午後5:00を過ぎていた。父親のA.R氏の授業が長引いたためである。父親のA.R氏(日系

3世) 母親のD氏(ペルー人)そしてKの通訳で話は進行した。

—— Rさんは向こうでどのような仕事をしていたのですか ——

「化学を教えていました。トロフィーヨ公立大学というところです」

—— なぜ日本に来たのですか ——

「ペルーでは給料が安い。家族が多いし、子供の教育のこともある」

—— こちらではどんな仕事をしているのですか ——

「印刷会社にいます。品物のチェックをする係です」

—— 帰ったら大学でまた教えられるのですか ——

「ペルーには戻らない。ペルーに戻っても大学の教員になるのに試験がある」

—— 大学には戻りたいと思いますか ——

「大学は今、教育を忘れ、政治化している。ペルーの大学には日系人の教員も多いが………  
どうなるかわからない」

母親のD氏に話を聞いた。

「夫は住んでいてあまり考えないが、私はいつでも日本のことを考えている。特に教育はペルーと違う。カーリーナは日本語を話し、毎日友達とあっている。私は毎日、彼女に頑張れ、頑張れと応援している」

—— Kの将来については家族でどんな話しをしているのですか ——

「わたしたち3人でいつも話しています。外国語とくに英語を勉強しなさいって。日本語も勉強しなさいともいっている。日本語を覚えたら、ペルーの日系人の学校で日本語を教えられるから」

—— そうすると将来はやはりペルーに帰りたいのですね ——

「Rは日本にいたいと思っている。でも私はペルーが自分の国。でもRが日本にいるので私も今は日本にいる。Kはペルーかアメリカに行かせたい」

—— Rさんは日本が自分の国と考えているのですか ——

「生まれたところはペルー。おとうさんとおかあさんが日本の国のことを教えてくれた。ただ、自分の国はというと、わからない」

Kは7人兄弟の一番上であり、日本には、下の兄弟3人と来ている。ペルーには4人の子供が残され、Kの家族は今ばらばらの状態である。Kは、下の兄弟の面倒を見ながら勉強をしている。彼女の置かれた立場は決してよいものとはいえないがKの夢は「通訳」になるこ

とである。そのために日本の高校そして大学への進学を希望している。それは、家族の夢でもあった。しかしそこには高校及び大学の入学試験システムが問題になる。外国籍児童・生徒用のシステムが問題になる、と感じた。

「あなたの言っている意味がよくわかりません。もう一度言ってください」。通訳のあいだ中彼女は、再三こういって筆者らに聞き直してきた。そのためヒヤリングは遅々として進まなかったが、それでも、午後6:30分を過ぎてもお、それは続けられた。

「日本語教室」でのヒヤリング結果は、日系人児童たちが直面する困難な状況と同時にそうした状況のなかでも熱意と明るさをもってそれを乗り越えようとしている現実とを筆者らに教えてくれた。彼らが直面しているのは言葉の問題だけではない。彼らの日常生活のなかでもっとも大きい問題は学校での教員及び日本人児童たちとの距離の取り方とそれをどう位置づけ、どのように自己を確立するか、との問題である。彼らはなお「社会化」の過程にある。彼らの抱えた悩みを通して我々は、自らの社会の「社会化」と秩序体系への「社会統合」の性格を知る<sup>(10)</sup>。

#### 4. 補論：シングル・ウーマン

ここまで筆者らは、日系人の immigrant experience の諸相と彼らの抱える課題とその「思い」について「単身就労者」「家族」「児童たち」のそれぞれの立場から見てきた。だがここまで「フィールド日誌」の形を借りた彼らの世界の呈示には、もう一つの伏線があった。それは、女性の立場からの immigrant experience の諸相の理解が必要であるとの認識である。だが、その問題については「家族」の節での「Oさん」、そして「児童たち」の節での「少女K」といった女性たちの話しを通して、ある程度は試みてきた。そこでここでは「補足」として、「ペルー日系協会」のヒヤリングで出会った、ある独身の女性の目を通して現在の在日の日系人の問題について「フィールド日誌」から取り出してみたい。

「ペルー日系協会」が日系人の結節的組織であり、彼らの活動を知ることがそのコミュニティの性格を理解するうえで必要であることについては、これまでの調査から分かっていた。1992年7月26日（日）筆者らは、再び川崎市にある「ペルー日系協会」にヒヤリング調査に向かった。「ペルー日系協会」の会長であるルイス金城氏があまり日本語を話せないというの



で、通訳に一人の女性が同席した。彼女がN. A氏であった。はじめのうち筆者らのヒヤリングは「ペルー日系協会」の活動に焦点を合わせておこなわれていたが、途中からN. A氏の、要点を押さえた回答と話しの面白さにひかれて彼女の話しにその内容が移っていった。

Aさんは日系ペルー2世である。彼女の両親は沖縄の与那城村の出身である。与那城村からはほとんど村民全員がペルーに移住しているという。日本への再移民は、今から12年前であった。彼女は、ペルーで生まれペルーで高校を卒業する寸前のことであった。

「私の場合は、家族で日本にきました。おかあさんがさびしがつて日本に帰ることにしたんです。でも私は日本に来たくはなかった。日本にも興味はなかった」

日本への再移民について彼女は随分抵抗した。

「それで私は、1年ぐらいひとりでペルーで生活していたんです。ただ、おとうさんからはやく沖縄に来てこっちで勉強しなさいっていわれるし、自分でも家に戻ってもおとうさんもおかあさんもいないし、家族は沖縄にきていたから、それでしぶしぶ決心したんです」

——日本で生活するようになってから随分経ちますがここでの生活はどうか——

「ペルーの日系人は、例えばペルー人と一緒に学校に行ったとしても、100パーセントペルー人にはなれないんです。ちょっと恥ずかしがりのところがあって。それでも、遊びかたなんかはやはりペルー人の影響を受けている。また、日系人はペルー人から見ると信用できるイメージで見られてもいますし、日系人は日本人に対しては、親切とか思いやりのある人々とかの印象をもってきた。それで、日本に来たのは自分がペルー人ではなくあくまでもその日本人だからと思ったからですが、日本に来てみて自分は日本人と違うし、日本もイメージがあまりにも違うので、ショックを受けたし寂しかった」

彼女は、日本に来ている他の日系人も多かれ少なかれこの問題では悩んでいるという。「日本は、言葉ができてもできなくても帰りたいと思っている人は多い」

彼女はまた、日系人と日本人とは根本的に違う民族である、と感じている。

「日系人は他の国に育っている。日本で育っている日本人とは違う。日系人の2世や3世は日本人の顔をしています。もしかしたらペルー人なのかな、と思う。日本人の顔をしてどうしてそうなのかなと悩む」

彼女は日本人の世界は理解できるが、やはり入り切れないと言う。

「日本は好きではない。自分は生きてはいられない。12年も経っているのに日本人の世界はわかるが、でも自分はその世界には入れない。何年いてもまわりの日本人とは考え方が違う

んです」

だが、彼女は決して日本社会に不適應の状態のままで過ごしているわけではない。現に「ペルー日系協会」での彼女の活動や、居住地の東京中野での、留学生を対象にした日本舞踊や民謡サークルの活動などは彼女の活発な行動を表している。

「自分がいたいならその世界を理解するしかない。どうしても好きじゃないなら自分ができるしかないもの。日本語を勉強したくないと思っていたら、結局10年いても日本語ができない人もいるから」

だが、彼女の受けたカルチュアショックは大きく、そしてそのカルチュアショックを経た後の彼女の心理は微妙である。

「本当はアメリカに行きたいの。日本に来ている日系人だって本当はアメリカに行きたがっている。ただビザの関係で日本にきてしまう。皆向こうにいきたがる。向こうにはラテン系の人達がいるから」

「簡単にアメリカに行ければ皆行くでしょう。日本人の世界には入りにくいから」

彼女は現在30歳であり、結婚の問題も控えている。結婚については当然日系人は日系人同士の結婚が最適であるとかんがえている。しかし、現実には必ずしもそうではないと彼女は言う。

「最初のうちは、自分の言葉が出来る人がいいとかいいながら、この頃は結構日本人と結婚するひとが多くなってきた。日本で結婚する人は、女性の場合、親戚とかの知り合いをとうしてする人が多いようですけど」

彼女へのインタビューは短いものではあったが、ここからは日系移民の様々な移民経験とそこでの課題が透視される。最も重要なのは、受入れ社会日本での「適應」の位相である。彼女の場合、決して「適應」ではないが「不適應」でもない。彼女の日本での移民経験は決して順調ではなかったが、しかし、主体的にその状況を乗り切っている。彼女は、受入れ社会にいたいのなら積極的にそこの文化を身につけなければならないと考え日本語を習得した。彼女の日本語は、日本での滞在暦12年ということもあるが、きわめて流暢で日本生まれの日本人とかわるところはない。自分の置かれた状況を積極的に受入れ、しかし「同化」することなく、その状況に応じた自己確認をはかる。しかしながら彼女は、ペルーにも日本にも「帰属」しない。彼女の自己は、受入れ社会のなかの異質な要素である日系人コミュニティにあ

り、同じ立場の留学生ソサエティにある。それはきわめて状況適応的でもある。彼女の自己確認は、現在の受入れ国でなされるとは限らない。彼らと同種の人々あるいは同種のコミュニティが存在する社会ならそれは国家の枠を越えて彼らの準拠する集団となる。

彼女に見られるこうした「状況適応的自己確認 (situational identity)」の形態は、今後の日系移民の人々のなかに多くなってくると思われる。

## 5. 事業家 (ethnic entrepreneur) とコミュニティ組織

事業家 (ethnic entrepreneur) の存在はエスニック・コミュニティの形成のキーポイントである。彼らの活動のあり方によって彼らのコミュニティのあり方が規定される。鶴見における日系人コミュニティの形成はまだ途上にあるが、核となる組織やコミュニティの自立の条件は着実に育ちつつある。「ペルー日系協会」の設立と活動内容の調査を実施する過程で筆者らは、ひとりの「事業家 (ethnic entrepreneur)」に出会った。彼は「ペルー日系協会」の産みの親でもあり、日系人の会社を経営する事業家でもある。彼の事業はまだまだ小規模ではあるが、こうした「事業家 (ethnic entrepreneur)」が数多く誕生すれば、日系人コミュニティは、就業機会の面でも「異国」において確実に自立の道を歩み始める。それは、いわゆる“外国人就労者の集合としてのコミュニティ”とは明らかに次元の異なる、日系人独自の“エスニック・コミュニティの誕生”となる。今はまだ可能性に過ぎないこの方向性を探るために、以下、「ペルー日系協会」と「事業家フェルナンド氏」へのヒヤリング結果の一部を紹介しよう。

### (1) [ペルー日系協会：1992年7月26日（日）川崎市尻手]

川崎から南武線で二つ目の尻手駅に「ペルー日系協会」がある。同協会の現会長であるルイス金城氏にインタビューをした。ルイス氏は、7年前にペルーから日本に来た。現在は家族3人で川崎市に居住し溶接作業の検査をする仕事に従事している。

——「ペルー日系協会」設立のいきさつはどういうことだったのですか——

「この協会は5年前につくられました。そのときの会長はフェルナンド比嘉さんだったのですが、そのときはまだ30人程度で、主にサッカーの試合をしたりする程度で、いわば親睦団体でした。日本に来ている日系の人達は友達がほとんどできない。寂しいので友達を集めるためにつくったと聞いています。その当時はボリビアの日系人が多くここに来て活動していたようです」

—— 必ずしもペルーの人だけとは限らないのですか ——

「もともと、フェルナンドさんは、『沖鶴会館』に顔を出していて、沖縄の人達とは知り合いだったので、ペルーの人もいればブラジルの人もいます。それぞれの仕事場で知り合って友達になれば、ひとりがここを知るとその友達をつれてくる状態です。ただ別に私達は、沖縄人だけに限って集めているわけではありません。偶然、結果として多くなったということなのですが」

—— どんな活動をしているのですか ——

「いろいろですが、大きなイベントの一つとして、例えば『ワジー・ワジー・カップ(wagi-wagi cup)』というサッカーの試合をやっています。2ヶ月間ぐらゐの期間で幾つものサッカーチームが参加して、毎日曜日に集まって試合をします。今は和光大学のグラウンドを借りてやっていますが、そこに、参加する人達の家族も皆応援にきます。奥さんや子どもたちが一緒に集まって、500人ぐらゐ毎週集まって来ますが、グラウンドにお弁当をもってきてパーティをやっています。本当はバーベキューのようなペルー料理をそこでだしてやりたいのですが、場所を汚せないのですこまではできませんが」

—— その他の活動としてはどんなことをしているのですか ——

「母の日のパーティや、“フォルクローレ”とってペルーの独立記念日のパーティ、正月のパーティやカラオケ大会などを行っています。フォルクローレは、川崎産業会館を借りていつも400人ぐらゐの人達が集まります。ビンゴゲームをやったりダンスパーティをやったりいろいろです。正月のパーティは去年は晴海の見本市会場を借りて、12月31日の夜11：00ごろから始まって1日の朝の5：00ごろまでパーティを開きます。母の日のパーティは初めは沖鶴会館でやっていたのですが、集まる人達が多くなり過ぎて、今年50人の母親を招待してその人達が友達を連れてきたものですから凄い人数になってしまって、野外で、多摩川のグラウンドに1000人近くのが集まってバーベキュー大会をしました」

「それに少年セミナーとって、違う国の人との交流会をやったりして凄く楽しくやっています」

—— どうして皆この組織に集まってくるのですか ——

「ここを手伝っている人達はわりと長く日本にいる人達が多いんです。参加している人達や家族は皆しょうがないからいるようなところがあって、つい自分の言葉ができるところにあつまってくるのではないですか」

(2) [事業家フェルナンド氏：1992年11月6日、11月9日]

「ペルー日系協会」は、フェルナンド比嘉氏がつくった組織である。11月になってやっと筆者らは、ペルー料理店でヒヤリングをしている最中に、偶然その料理店を手伝っているエレイラ氏から、「ペルー日系協会管理部長」の肩書のはいった名刺を渡され、この料理店を含むいくつかの事業が、「ペルー日系協会」創始者のフェルナンド氏によって経営されていることを知った。筆者らは事業家フェルナンド氏を中心とするヒヤリング調査を再開した。機会が訪れ、彼に「ペルー日系協会」のことそして「ペルー料理店」を始めとする事業のことを聞くことになった。

フェルナンド比嘉氏は、1984年に日本に来た。初めの2年間は沖縄大学で日本語を勉強し、その後東京の大田区にある「三菱」系列のコンピューター会社に就職しそこを2年ほどで退職し川崎市に来た。彼は、ペルーの「リカルド・パルマ大学」で電子工学を専攻した。筆者らがコンタクトをとった時彼はちょうど、沖縄に9月にオープンしたペルー料理店の“テコ入れ”のため沖縄に行くところであった。1993年の1月まで、沖縄に家族で滞在し、経営のシステムづくりをするという。彼の日本語は極めて流暢であった。

—— お忙しいところ恐縮ですが今の事業はどのような内容ですか ——

「今、食料の輸入と旅行代理店とペルー料理店をやっています」

—— 日本で事業をしている日系人は多いのですか ——

「出稼ぎに来て日本で自分の会社をもつ人は、いまのところ、レストラン経営が多いようです。これは、もともとペルーやブラジルで日系人はレストランや食堂を自営することが多いので、同じ仕事がやりやすいということも影響しています」

—— 資金をためるのは大変ではないですか ——

「ここ（日本）で店をだす場合、お金がかかります。だから“親会社”がお金をださないと無理です。私は、親会社が『ティア・マリア・ジャパン』というところで、ここにお金を出して貰いました。『ティア・マリア・ジャパン』という会社は、『リード・ジャパン』の系列で、ラテン・アメリカの酒類の輸入と販売をしています」

—— ところで「T. H. M」の社員は今何名ですか ——

「常時いる社員は4名ですが、日系人のアルバイトが随時います。社員は、私の友達とか仲間を誘ってやっています」

—— 一番初めに手がけたのがレストランですか ——

「そうです。レストランが他の日系人の事業としては一番多い。例えば『ヤンバル』の場合は、経営者は勿論日系ですが、もう10年以上日本に住んでいる人がやっています」

—— 将来はこうした事業を拡大していくつもりですか ——

「そうです。T. H. M は今食品の輸入ですが、将来は、販売などもやりたい」

—— これから日系人の事業家は増えてくるとおもいますか ——

「増えてくるし、そうした人はいる。でも問題は言葉です。日系人はあまり日本語を喋れません。でも気持ちはある。日系人で日本語を勉強して日本人と話しが通じるようになったら増えると思います」

フェルナンド氏も、前述のルイス氏も同じ「ペルー日系協会」の関係者である。

「『ペルー日系協会』は5年前に設立しました。実は私は日本に来る前、ペルーで、プロのサッカーチームにいたことがあるんです。『シクリシタ・リマ』というチームなんですが、日本に来てから同じ日系人が段々おおく来るようになって、友人を集めてサッカーチームをつくらうというのはなしが持ち上がって、それで、当時20名近く集まりましたか、ユニホームを作らうということになりました。でもお金がないもんですから、資金集めのためのダンス・パーティーを開いたんです。そしたら50人ぐらい来まして、50万円ぐらい集まったんです。それでこの中から約半分をユニホーム代に回し、残りをプールしてクラブをつくったんです。それで、毎年3回ぐらいずつパーティーを開きさらに資金が集まったので日系人の協会を作らうという話しになって、サッカーだけではなく、文化活動もしたいし出稼ぎのひとたちのために法律相談も始めようということになって、今のような『ペルー日系協会』が出来上がったんです」

—— 現在こうした活動や事業をしたいという人達への何かメッセージはありますか ——

「いろいろなラテンアメリカの日系の人達が今日本に来ていますが、まず日本語を勉強しなさいと言いたい。次に日本の生活のシステムや仕事のシステムを学びなさい、と言いたいです。自分で目的があってそれをするためには日本語を知らないとだめですから、これを言いたい」

フェルナンド比嘉氏の奥さんはボリビア生まれの日系人である。両親は沖縄からボリビアに移住した1世である。彼女はその後ブラジルに移り現地で高校を卒業し、その後沖縄大学入学、中学校で英語の教師をしていた。フェルナンド比嘉氏とは同氏が琉球大学で日本語を勉強しているとき、留学生同士のパーティで知り合い結婚した。その後は翻訳や通訳等の仕事をつつ2名の子供を育てている。

フェルナンド氏も奥さんも、そしてルイス・エレイラ氏も共通しているのは、日本（人）

もペルー（人）ないしブラジル（人）も、彼らのなかで相対化されているということである。かれらのような活動家・事業家を「媒介者（middleman minority）」と呼ぶことが可能であろうか。

## 6. 対応する人々と舞台としての都市「鶴見」

さて、以上のような日系人コミュニティの形成は“真空”のなかで行われるわけではない。彼らのコミュニティ形成および immigrant experience の諸相は鶴見の地域的性格の中で生起している。日系人コミュニティの形成の過程では、日本社会の側の様々な人々、機関が彼らとの対応におわれている。なかには思いがけなくも対応を迫られる人々もいる。「受入れ社会」と「母国」との「はざま」に生きる人々に直接対応するひともまた自らの「調節」能力ないし「異邦性」が試される。それは都市社会に生きる我々自身の問題でもある。最後に、こうした対応を迫られた人々の、その「対応のかたち」や「異質性への距離の取り方」に焦点をあわせることで都市「鶴見」の社会的性格について見ておきたい。

日系人コミュニティの形成のプロセスにあって最も身近に彼らと接触する受入れ社会側の人々および組織としては、まず「日本語教室」の教員たちが挙げられる。日本語教室の仕事は、しかし、単に言葉を教えることだけではない。彼らの仕事には必然的に、異質な人々への理解と、コミュニケーションを必要とする様々な仕事が入り込んでくる。彼らとの距離をどうとるか、ということがそこでの重要なポイントになってくる。例えば「日本語教室」には子どもたちだけでなく、ときにその母親たちも“便乗して”日本語を学びたいという意思を示す。彼らのそうした意欲はしかし本来の「日本語教室」の役割を越える。こうした人々への対応は、「日本語教室」の講師たちのその場に応じた臨機応変の処置にかかってくる。日本語教室の講師になる人々は、ほとんどが海外での生活体験を持っている。自らが「異邦人」としての立場にたち、異国の文化を理解しようとした経験がある。彼らとの接触には、制度の形成によって解決する問題ばかりでもない。

外国籍児童たちにとっては、学校と日本語教室だけが、その世界ではない。彼らは放課後、おもに自宅とその周辺で遊ぶという指摘がされているが、彼らはときに、自分たちにとって“取っつきやすい”公的施設にも出掛けていく。そうした公的施設の一つに「コミュニティ・センター」がある。特に鶴見では、「生麦地区センター」がそうした施設にあたる。「地区センター」の機能は、コミュニティ形成の場を提供することにあるが、この「地区センター」の特徴は、地域の生活課題への対応と、新しい生活課題を発見する“アンテナ性”にある。

彼らの活動が維持されるのはしかし、そうした地域の生活課題を発見し、それらを、「地区センター」にあてがわれた役割を越えて柔軟に対処する「地区センター」指導員——横浜市ではこれを「コミュニティスタッフ」と名づけている——と地区センター館長の役割が大きい。彼らの、現場レベルでの規則の準用によって、以上の活動が保持されている。特に外国人への対応に関しては、通常の「地区センター」の規則の準用では対処できない問題が数々生じるが、「生麦地区センター」では、指導員と館長のこうした臨機応変の処置によって、それが可能になっている。

思わぬ対応を迫られる機関もある。「鶴見総持寺」は社会事業の活動でも知られるが、この母子寮にも、外国人母子の入寮が増えてきた。「鶴見総持寺」では昭和18年以来母子寮活動を実施してきたが、現在20世帯の母子家庭が入寮している。筆者らがおとづれたとき、外国人母子は偶然同寺の母子寮には入寮していなかったが今後こうした層の外国人問題も増えてくるのではないかと予測される。

神奈川県、および横浜市には、いわゆる「相談コーナー」がいくつかあり、そこで外国人の生活相談の仕事をしている職員のなかには自分自身が日系人である人々も多い。無論こうした彼らの対応の熱心さにもみるべきものが多いが、行政の内部にあって外国人対応の仕事をしている人々のなかにも意識の変革を迫られている職員たちがいる。従来コミュニティ行政からすれば外国人問題はまだその射程に入っているとはいえない。しかし、それをコミュニティ行政の担当範囲内に含めなければならないという意識は徐々に芽生えてきている。近年の鶴見区への日系人の流入現象は、「沖縄から直接に働きに来る人々と、沖縄からブラジルを経由して、さらに知人を頼って鶴見区にくる人々の二つの方向からの流入経路としてとらえなければならない」という。日系人もここでは、「外国を経由して日本に入ってくる日本人」<sup>(11)</sup>との読み換えも試みられている。

日系人コミュニティの形成に関する、鶴見の特殊事情は大きく分けて二つある。一つは「沖鶴会館」に代表されるネットワークの結び目の存在である。沖縄を中心とする、戦前のハワイ移民および軍事的戦略にもとづく南洋諸島への移民たちが、戦後の引上げ後に、土地を買い建物を建てて、身を寄せる場所を確保したことに始まるこの「沖鶴会館」は、現在鶴見区仲通りにあるが、鶴見の日系人コミュニティ形成にあっては象徴的な存在としての役割を果たしてもいる。もう一つの特長は「都市」としての鶴見の性格にある。

鶴見は、もともと古い「漁村」としての歴史の上に、京浜工業地帯の一角として発展した。川崎や横浜の「はざま」として、様々な要素が混在する地域でもあった。上記の沖縄系住民の集住や戦時中の韓国人の強制連行などもその一つであるし、また、独り暮らし老人の居住



割合の高い地域としても有名で、いわゆる迷惑施設が押しつけられる地域でもあった。各種のヒヤリング調査においても、地域現場で福祉行政や保健行政に携わっている人々から、「ここは、何でも受入れ、それに住民からの文句がでない地域」との性格づけがなされていた。だが「何でも受入れ、住民からの文句がでない地域」としての性格は少なくとも、外国人居住者のコミュニティ形成にあってはプラス条件として作用している。「何でも受入れ、住民からの文句がでない」「場末の」「工場地帯」の典型としての鶴見は、外国人問題に関する限り、“異邦性”を受け入れる最先端の「都市」としての典型として見ることもできる。鶴見の日系人コミュニティ形成はこうした「都市」鶴見の、地域的条件を背景として展開している。そしてそれは、対応する人々の個人的なパーソナリティや行動の仕方のなかに散見されるのである。

### III. 結論：「エスニック・コミュニティ」論断章

#### —— 異質性認識と都市社会学 ——

以上不十分ではあるが、本稿では「鶴見の日系人世界」の特徴と彼らの「移民経験」の諸相を「異質な世界への適応過程」の観点から明らかにしてきた。無論「適応」は「異質な社会」での「統合」の過程でもある。ここでの調査はまだ始まったばかりであり本稿はその一部を紹介したにすぎない。それでも現時点における彼らの直面する「現実」についてはある程度伝えることが出来たと思う。ちなみに、ここで取り上げた日系人世界は、一定地域内に集住する就労者を中心とした集団というのではなく、子どもや家族そして結節的機能を果たす組織そして自営の事業家などを含む、必ずしも特定地域に限定されない広がりをもつ社会的な集合体である。その意味でこれはまさに都市のエスニックコミュニティとしての性格を備えている。

本稿での「面接調査」が対象にしたそれぞれの「現実」に関する簡単な考察については既に各項目において述べたきたが、そこで提起される具体的な問題点としては、例えば「単身の就労者」に関しては、一時的な居住ゆえに彼らが自らのコミュニカルなネットワークとその拠点を必要としている現実や彼ら自身もつエスニック意識の問題がきわめて重要なポイントであること、また「家族」に関しては、彼ら自身のソリダリティやその成員の行動と意識を左右する、「移民」をめぐる家族としての「論理形成」の問題が重要なポイントになること、そして「児童」に関しては彼ら自身の「適応」と「社会化」の過程にはたす家族や教員や学校システムの役割が重要であること、さらに「事業家とコミュニティ組織」に関しては、

その国家の枠を越えたネットワーク的世界としての性格が問題になること等をそれぞれのポイントとして指摘しておきたい。

だが本稿を終えるにあたって我々は、以上のような具体的な問題の根底に、次の諸論点が潜んでいることについても指摘しておきたい。現在の「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」研究に潜む論点やテーマとしては、まず(1). 相互の「異質性認識」と「状況の定義」の問題が上げられること。日系人の場合、日本社会との接触の仕方はきわめて微妙なものがある。彼らの日本社会との接触の始めは、祖国であると考えていた社会で自分はいくまでも外国人であると認識することから出発する。例えば、「単身就労者」や「家族」そして「児童」へのヒヤリング調査から呈示されるように、彼らは異質な世界での互いの視線のなかで彼ら自身のおかれた「状況」を確認し、自らの「エスニシティ」を確認する。このテーマは前述の面接調査のあらゆる側面に潜む問題でもあるが、彼らはこうした「相互の異質性認識」の過程で、基本的には自らを「外国人」と定義し、彼ら自身の「移民」行動を「論理付け」、自らのアイデンティティの所在を確かめる。とりわけ「児童」の場合、彼らのそうした行動に、家族の「論理形成」の果たす役割がおおきいことも示唆された。我々は、ここでの「異質性認識」と「状況の定義」のさらに詳細な過程について分析する必要性を感じている。

論点の(2)は、「適応形態」其自体に関する問題である。彼らは必ずしも受入れ社会に「同化」しようとしているわけではない。だが「シングルウーマン」「少女Kの移民経験」等の項目において見られたように、彼らは言語や習慣に関しては見事に理解し「適応」する。彼らのこうした「適応形態」に生じる様々な問題の理解なしには彼らに独特のアイデンティティ形成の問題は解釈できない。ここでは彼らの「適応」がまた、特定の国家ではなく、自らのエスニシティの所在に応じて変動するという事実にも我々は注目しておく必要がある。

論点の(3)は、「児童の適応」と、わが国における社会統合の「エージェント」としての役割をはたす機関の性格に関する問題である。前述のように「適応」と「統合」とは同じコインの裏表である。とりわけ本稿での調査結果からは、児童の社会化の問題については①家族の意識と論理形成、②納得の程度、③教員の教育姿勢、④受入れ社会の側の児童の態度（同調と非同調の許容に関する態度や閉鎖性の問題）、⑤教育システムの問題等が関わる。我々は、こうした諸次元における問題点とそれぞれの関係性の一部について、既に調査報告のなかで示してきたが、さらに児童の問題については「家族」の問題と教員及び教育システムとの関連でさらに詳細な分析を展開する必要がある。このテーマはわが国における「統合」形態ないし秩序形成の過程を探る有効な視点を提供する。

論点の(4)は、エスニック・コミュニティの組織的性格の問題が上げられる。我々の面接調査では彼らの独自の行動を支え保障するその世界が、特定の国家や地域の枠を越えて成立する事実が提起された。無論それは、特定の固定された組織というよりは彼らの経験の独自性を保障する「世界」としての存立の仕方の問題でもある。とりわけ本稿では、沖縄出身ということの一つのキーワードとして彼らのつくるゆるやかな「コミュニティ」としての性格が彼らの自己確認の形を作り上げていることが随所に散見されたが、彼らのそうしたコミュニティとしての組織形態をどのように概念化し、分析するかが今後のテーマとなる。

本稿において提起される論点の最後として、彼ら「移民」の異質な世界への「適応」の諸現実が提起する問題は、同時にわれわれ自身の問題でもあること、そしてそれが都市社会研究の本質的なテーマであることについても主張しておかなければならない。

もともと本稿での「面接調査」は、横浜市の「地区センター」に集まる外国人の問題を出発点としていた。通常のコミュニティ行政からでは「見えない領域への通路」として機能する地区センターの役割と機能をとおして本稿での調査が実現した。本稿で扱ってきた「日本語教室」や地区センターは「社会的結節点」としての機能を果たす施設である。都市はそうした地区センターや日本語教室などを含む様々な「社会的結節点」の集合する空間であるとするなら、まさに本稿での我々の面接調査は、そうした「社会的結節点」を通路とした都市社会研究のひとつの方法でもある。

だが問題はそれだけではない。実際彼らの適応の形態と論理を見ていくと我々は、都市という舞台の上で、われわれ自身の異質性認識の形態を理解する必要があることを気付かされる。例えば、本稿の調査では再三、彼らの適応と自己確認の形態が、受入れ社会への同化を指向するのではなく、むしろ対等の立場での「擦り合わせ」を要求している事実を指摘してきた。「シングルウーマン」の項や「ある少女の移民経験」そして「児童たち」の項で示した彼らの行動が意味するものは、むしろ受入れ側社会の人間との対等の資格での「適応＝調整（adjustment）」をどうとるかの課題であった。その意味で我々は今「相互の異質性認識」にもとづく、独特の「コミュニティ形成」とそこに生ずる諸問題という、伝統的な都市社会研究に含まれるテーマ群に直面していると感じている。いわば、エスニックス個々人に焦点をあわせることで家族の問題が現れ、それら家族の問題に注目することで国家や国籍の問題が、そしてこの問題に注目することで「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」の性格や都市の社会的性格の問題が考察されるのである。

われわれは「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」の「適応」と「統合」に関する新たな視点と方法を探りつつ、今後この過程の分析をとおして、さらにこの意味での都

市社会研究を進展させていかなければならない。

\*本稿は、1992年6月から続けて実施している「横浜市におけるエスニック・コミュニティ「調査」の一部であり、特に6月から11月までに行われた「面接調査」の結果を「フィールド日誌」から要約する形で公表するものである。「フィールド日誌」の、より詳細で完全な報告は「明石書店」より近刊の『都市的世界とエスニシティ』（仮題）に収録されている。本稿はその報告を加筆修正する形で要約したものである。また本稿で紹介する「鶴見日系人コミュニティ調査結果」は「専修大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程」に在籍する藤原法子氏との共同作業のもとに実施されており、1992年6月から現在に至るまでのヒヤリング調査のほとんどに同氏は参加し自身のフィールド日誌を記録してきた。本稿では、基本的には広田の「フィールド日誌」を中心にとりまとめたが、同氏の研究テーマが、「外国籍児童」を素材にしているため、以下の幾つかの部分については同氏が分担執筆した。同氏の執筆分担部分は「II-2-(2). 再びワウケ氏宅にて」「II-3-(2). 思春期の児童の事例」「II-3-(4). 再び豊岡教室」である。

- (1) 「鶴見の日系人面接調査」の直接のきっかけは、横浜市鶴見区生麦の「地区センター」を調査したことにあった。横浜市の「地区センター」調査は、横浜市企画財政局企画調整室「コミュニティ行政研究会」において実施されたコミュニティ基礎調査の一環としておこなわれたが、筆者らの「日系人面接調査」はそこから発展するかたちで独自におこなわれたものである。なお「地区センター」調査の結果については、拙稿「都市コミュニティの結節点としての地域施設に関する実証的研究」『横浜市コミュニティ行政基礎調査（中間報告）』横浜市企画財政局企画調整室編、1992年、及び、拙稿「コミュニティ施設と地域的生活課題の諸相について」『専修人文論集』第50号、専修大学、1992年、にまとめてある。
- (2) R. E. L. フェアリス『シカゴ・ソシオロジー 1920-1932』奥田道大・広田康生訳、ハーベスト社、1991年。
- (3) 小倉充夫氏によれば「国際労働機関はその機関の特徴からうかがえるように、雇用を目的として国籍と異なる国に移動する人を移民」と定義している。同機関によれば移民は①自由移民、②公務および業務移民、③定住移民、④契約移民、⑤変則的移民の5つの類型に区分される。この類型化にしたがえば、本章でヒヤリングした日系人は④の契約移民を中心に、③定住移民および⑤変則的移民のカテゴリーにいれられる人々ということになる。小倉充夫「移民・移動の国際社会学」梶田孝道編『国際社会学』名古屋大学出版会、1992年。
- (4) 筆者らの「調査」の経緯についても述べておかなければならない。前述のように「生麦地区セン

ター」をヒヤリングして筆者は、地域における社会的な結節点としての「地区センター」にさまざまな問題が抱え込まれ、同館スタッフを中心に、公私にわたる対処が図られている実態に驚き、同時に地区センターを“通路”として通常の「都市コミュニティ調査」では「見えない領域」に接近できることにも気がついた。調査は、したがって「生麦地区センター」の館長および指導員へのインタビューから始まった。筆者らはここで沖縄県出身の日系ブラジル人を紹介され、彼の家族へのインタビューを実施すると同時に「同センター」の「日本語教室」講師を通して、“通学”して行く単身者たち（主に日系ブラジル人）へのヒヤリングへ進んだ。またここでの調査の最中に、横浜市教育委員会が市内の三つの小学校に設置している「日本語教室」の情報を知り、同教委を經由して「横浜市日本語教室 豊岡教室」（鶴見）と「本町小学校 日本語教室」（中区）のヒヤリング調査を実施した。「日本語教室」の児童たちと、その講師との接触は、彼らが直面する問題状況についてだけでなく、日系人コミュニティそれじたいの形成に関する情報を豊かにしてくれた。筆者らは、児童たちを通じて、日系人の“親睦組織”である「ペルー日系協会」や、彼らの情報源及び就業斡旋業としての「旅行社」及びその「旅行社」を経営している家族の存在を知った。「ペルー日系協会」でのヒヤリングを通じて、鶴見の日系人の“結節点”として機能する「沖鶴会館」の存在や、ある日系人少女（日系ペルー人）とその家族との出会い、そして「同協会」で活動している日系人女性との出会い、さらに国内外の日系人の全体組織である「海外日系人協会」へのインタビューがおこなわれた。日系人ヒヤリングの過程では、よく、エスニック料理店の話が出てきた。エスニック料理店については、しばしば、「情報交換の場所」としてのみ注目されがちであるが、本来こうした料理店とその経営者の存在は、移民（コミュニティ）が「受入れ社会」に根をはやし自立するときの指標としての役割を果たす。特に日系人の場合それは、彼ら自身の数少ない「エスニック・エンタープレナー（ethnic entrepreneur）」（＝事業家）として注目された。最後に、「都市」鶴見の「社会的性格」についても筆者らは興味をもった。鶴見の地域的特徴については、特に沖縄からの「移住民」が多いこと及び韓国からの「移住民」も多いことなど、その意味でもともと“異質”な要素を受け入れ、歴史的に慣れと理解を示してきたことに注目した。この問題については、現時点では、ごく一般的な記述しかすることができなかつたがヒヤリングは現在も継続している。

(5) なお、筆者らのヒヤリング調査の過程では、おもにその対象は、日系ブラジル人と日系ペルー人に焦点が合わせられた。彼らが、それぞれ独自のネットワークを形成していることは当然だが、現在の段階では、彼ら同士の細かな関係にまで立ち入って考察することはしていない。それも今後の課題とすべき点ではあるが、ただ、鶴見の日系人コミュニティの場合、沖縄出身ということがひとつのポイントとなる。沖縄出身を軸にして母国を異にする人々が集合することもある。本論で、あえて、“日系ブラジル人コミュニティ”“日系ペルー人コミュニティ”というように互いを、明瞭に

識別して記述しなかったのはそのあたりの事情が絡んでいるためでもある。

- (6) 話のなかに出てきた日系ブラジル人組織とは「日系アソシエーションセンター」(東京都港区新橋)のことを指す。また就業に介在する組織とは、「日系ブラジル人就業支援センター」(東京都千代田区神田)のことを指す。
- (7) フェルナンド氏の場合日本語はほとんど話せない。ハビエル氏の場合は、母親の方針(とその祖父の教育)で、向こうにいる時から日本語習得に熱心だった。会話はハビエル氏中心に、フェルナンド氏の場合はハビエル氏の通訳で行われている。
- (8) Yファミリーは、彼ら兄弟の他に、その両親が日本に来ていたが、半年前に、ブラジルに帰国している。Y兄弟の両親とくに父親は日系1世、母親は日系2世で、彼ら兄弟たちは準3世になるとYさんは言う。彼らは、日系1世の両親とともに計5人(長男の奥さんを含む計8人)で日本に就労に来た。両親は、早々とブラジルに戻り、あとは、兄弟のそれぞれが、いわば“単身の就労者”として生活を続けている。彼らは日系3世であり、ほとんど日本語をしゃべることができない。彼らの思考と行動は、ある意味で日本にきている就労者たちの生活を代表するものでもある。彼らのインタビューには、後述のY氏の御家族の同道があった。
- (9) ここでの「異邦人」の用語は彼らの日本社会への「移住経緯」に焦点を合わせて使用したものである。無論この用語に関する分析は社会学では詳細になされている。例えばA. シュッツなどはその代表であろう(A. シュッツ『現象学的社会学の応用』御茶の水書房その他)。なお、Yさん家族のそれぞれは、「帰郷者」「場所を変えた帰郷者」「移住者」(もしくは精神的帰郷者)として、シュッツの用語にしたがえば、異なった関連性構造をもつ。だがここではそうした議論に立ち入る余裕は筆者らにはない。ただ、同じ家族の成員がそれぞれの「帰郷者」「場所を離れた帰郷者」そして「移住者」としての「関連性構造」の間の違いを調整しつつ、家族としての絆と各人の自己確証を求めていること、そしてそのさい、「国境を越える」という彼らの経験の独自性を共有し保障する世界として「日系人コミュニティ」が彼らの基盤としてあること、を指摘するにとどめたい。そうした意味での彼らの調整のポイントが何であるかについては今後の筆者らのテーマおよび課題の一つとなる。
- (10) 両親の都合で日本にくる子供たちの場合、彼ら自身の自己確認と「適応」には、どのような条件が関わってくるのだろうか。特に子供たちの場合は、移民行為については自らが主体的に選んだのではない。したがって、親の目的への理解と納得が彼らの行為には非常に重要になる。日本社会へはいる時の“納得”の仕方と家庭環境が第一義的に重要になる。日本社会の受入れ方と彼らへの定義の仕方も重要になる。すなわち、学校の教師たち、周囲の子供たち、そして、かれらを取り巻く諸制度の在り方が影響する。たとえば前述の事例にもあるように、親と受入れ側の教師たちの対応

の遅れ——それは当該の児童の中学浪人という生活上の危機をもたらした——にもかかわらず、ある私立高校に新しく設置された帰国子女枠の適応という制度に、偶然、教育委員会の職員を介してその児童が結びつけられたとき、彼女は、みずからの位置を定め、自らのコミュニティの「国境を越えたネットワーク」を背景に、目標を通訳に選択し、結果として日本語の勉強に励むという行為を導き、自らの望んだ日本社会への参入ではないにせよ、はいつてしまった状況への積極的な自己確認の作業に結果していく。整理すれば以下の研究ポイントが重要になる。①家庭環境(親の就労意識、就労スタイル、就労条件)②納得の程度(親の就労目的に関する理解と新しい状況への自分の位置づけ)③目標の設定(将来の自分の目標と現在の状況をどう調整するか)④教員の教育姿勢(母国へのアイデンティティを維持させ、新しい状況へのアイデンティティをめざめさせることを可能にすることができるか)⑤子供の態度(閉鎖性、同調と非同調の許容に関する問題)⑥結節点としての日本語教室とボランティアの役割(彼らにとってボランティアとしての日本語教室は、公のそれとはまた別の、パーソナリティの保持という面においてきわめて重要である。さらに、“現実には”かれらの生活情報はここをとおしてかれら自身に伝達される——前回調査結果)⑦教育システムの問題(帰国子女枠に代表される、受入れ制度の問題)⑧歴史的に培われてきた地域全体の異質性への慣れと理解⑨彼ら自身のコミュニティの組織化とソリダリティの特徴である。

(II) 横浜市鶴見区社会教育課担当職員の言葉。なお詳しくは近刊の明石書店版を参照。

広田 康生(専修大学文学部助教授)

藤原 法子(専修大学大学院)

## <編集後記>

新年度第1号の月報は、広田所員と藤原氏（本学大学院）によるわが国の移民コミュニティについての実態調査報告である。よく知られているように、近年、国境を越えて労働力移動は大規模化し、今日の国際経済における「グローバリゼーション」の実体をなす現象のひとつとなっている。わが国もまたその例外ではなく、「外国人労働者」問題として多くの人々の関心を集めるようになった（蛇足だが、社研でも一昨年この問題に関するシンポジウムが開かれた。『月報』第350号を参照）。移民の受入れに長い歴史をもつ欧米諸国とは異なるわが国だけに、その実態の解明は急がれるが、本号における両氏の精密かつ興味深い日系人社会の実態調査はそれに大きな貢献をなしうるようと思われる。

今後とも、グループ研究や個人研究の成果の発表の場として、また、もちろん、所員個人の発表の場として、月報をご利用頂きたいと思う。月報に掲載されたこれらの研究成果をめぐって、社研内外にさまざまな議論がまきおこり、それがわれわれの研究の刺激となれば、編集子としてはこれに勝る喜びはない。幸い月報への投稿は順調であり、現在、7月号まではほぼ埋まっているので、投稿される方はこの点をお含みおき頂きたい。また、年報の原稿も現在募集中であり、こちらの方にもご応募頂きたい（応募の締め切りは5月14日）。

\*なお、新年度を迎え、社研事務局のメンバーが一部交代した。本年度の事務局員は以下の通りである。

（所長）麻島昭一 （事務局長）高橋祐吉 （財政担当）野口旭、浅見和彦 （研究会担当）室井義雄、川村晃正、作間逸雄、森川幸一 （編集担当）鈴木直次、加藤浩平、大橋英夫 （文献資料担当）加藤浩平、鳴根克己 （パソコン担当）吉田雅明。前事務局メンバーに寄せられたのと同様の、所員の皆様のご支援をお願いしたい。

\*また、本年度の定例所員総会は6月12日（土）に予定されている。多くの所員のご出席をお願いしたい。 (N. S)

---

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

（発行者）麻島昭一

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561

---